

No.	市町村大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
11	下諏訪町 大門	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○諏訪大社下社の七不思議(浮島) 「春宮裏にある砥川の島。砥川は昔から墨れ川といわれているが、この島はどんな大水が出ても沈まないという。浮島には浮島社が祭られている。」	○下諏訪町 ホームページ (http://www.town.shimosuwa.nagano.jp/kei/ku/demetsu/demetsu-index.html)	○浮島にある浮 島社 (http://wiki.fdiary.net/poylab/?NOINDEX&NEWS&INDEX)			○浮島社	○浮島							○浮島伝説 (類似伝説) ・浮島伝説(駒ヶ根市赤穂小鍛冶と中沢六山の間)	D622	1
12	岡谷市 堀ノ内	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○しっぽのない赤いへび 「岡谷の西堀に住んでいたケチでふくよかなオクフというお婆さんが、二羽のつばめが軒下につくった巣を疎ましく思い落としてしまったので、二羽のつばめは悲しい声を残して諏訪湖のほうへ消えていった。数日後、二羽のつばめがオクフばあさんの家に夕顔の種を運んできた。それを植えると見事な夕顔が実った。輪切りにした夕顔の中から取れぬ程の真っ赤な小さいへびが這い出てきた。あきれたオクフばあさんは、夕顔とへびを小井川の一里塚のやぶの中に投げ捨てた。やぶの中で大きくなったへびたちのしっぽは、オクフばあさんが夕顔を輪切りにした時に切られてしまっていた。しっぽのない赤いへびの大群がまるで見つ赤に燃えた火のおびのように大行進をして、地響きとともにオクフばあさんと家をひとおしにし、塩尻峠へと消えていった。」	○諏訪の伝 説pp.94-99.	○諏訪の伝 説pp.98.											○人間への戒めとしての災害(土砂) ※伝説の地(西堀・小井川地籍)は、岡谷市横河川の下流域に位置し、平成18年7月豪雨災害の時には土石流が発生している。 ※へびを呼んだつばめが諏訪湖方面からやってきたこと(諏訪湖には水神がいる)、地響きとともに家を押し流したことから、土石流災害のことと思われる。	D519	1
13	岡谷市 本町	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○流された四王 「茅野の宮川にある安園寺の門にたっていた仁王たちは、たたくてあくびばかりしていたので、いかめしかった顔がだらしなくなっていた。ある夏、四・五日も大変な大雨が降り、どろ水に押し流されてとうとう諏訪湖の岸まで流されてきた。その地を四王と名づけた和尚に、だらしのない顔の仁王は寺におけないと言われた。仁王たちはやがて諏訪湖の出口に流れ着き、照光寺に祀られることになったが、二度と捨てられぬよう顔を引き締めて立っているという。」	○信州の民話 伝説集成南信 編pp.49-51.	○仁王像 「信州の民話伝 説集成南信編」 pp.51.											○災害がもたらした地物(仁王 像) ※安園寺は宮川沿いの山の中にあるため、文章中の泥水に流されたというのは土石流の可能性が高いと思われる。	D613	1
14	岡谷市 川岸	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○諏訪市四賀桑原の鮎沢系図 「鮎沢肥前守六代之孫鮎沢源吾・孫右衛門・姉共二鮎沢村二而誕生、姉者橋原村へ嫁す、此時正保二丙戌五月廿三日、蛇崩レニ而家屋舗不残押流され、右商人漸く命をたすかり間夜橋原村姉之方江引越、正保三丙戌八月横川村江引移る、正保二兄十才、第八才」 「鮎沢肥前守の六代の孫に当たる鮎沢源吾、孫右衛門は姉と共に鮎沢村(岡谷市川岸)において誕生した。姉は橋原村(岡)へ嫁いだ。この時、正保二年五月二十三日(ユリウス暦=西暦1645年6月7日、グレゴリオ暦=西暦1645年6月17日)、蛇崩れによって家屋敷が残らず押し流された。源吾と孫右衛門の兩人はようやく命が助かり、橋原村の姉の所へ引っ越した。その後正保三年八月に横川村へ引き移った。蛇崩れにあった正保二年に兄は十才、弟は八才であった。」	○土石流災害と 伝承一身近な 防災のために一 世本正治氏講 演要旨pp.3												※伝説の地では、平成18年7月豪雨災害の時に土石流が発生している。	D723	1
15	辰野町	—	ことわざ	(辰野町に伝わることわざ) ○とびが空に種かくと雨が降る ○鳥が10羽揃って鳴くと大嵐が出る ○蛇を川へ流せば雨が降る ○川魚がよく釣れると雨 ○煙突の煙が立てば雨、北へなびいても雨 ○守屋山の方へすつとした雲が出ると雨になる ○釜へ水が溢れば雨がふる ○荒神山が近く見ると雨が降る ○天龍川の瀬音が高くなれば雨がふる ○夕方山鳴りがすると大嵐になる ○みみずがしいい声で鳴けば雨が降る ○草履と下駄をちんばにはけば雨が降る	○辰野町誌近 代編pp.1114- 1115.												○辰野町に伝 わることわざ	D585	8

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承媒体											キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号				
				形式知						暗黙知											
				文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り	儀式				慣習・風習			
16	辰野町	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○辰野編記 「信濃の山の重なりの中に信濃神二湖(しなのかむひのこ)と呼ばれる青く澄んだ二つの湖が、一筋に入り江に結ばれて並んでいた。上の湖を諏訪の湖、下の湖は伊奈の湖人もいた。古くから湖の底には魔の神が住み、時には魔人の怒りが嵐を呼び、洪水をきたした。そこで村人は、魔の季節に入る六月六日になると湖の南にある小高い荒神の岡に集まり、音木を打ち祝詞をあげ、二歳になる雄鹿を湖底に沈めて生贄をする習慣を持つようになった。ある年、この祭りが終わった直後、一天候にかき曇り七日七晩風が続き、いっこうに衰える様子があった。東の村に住むおさの娘・梨恵が、自ら生贄に代わって湖に飛びこもうとした時、嵐の甲から「待て、しばし、七月七日竜天へ昇る」という声が聞こえてきた。七月七日の雲ひとつなく日が天頂にさしかかった時、たちまちにまじまじと暴風雨となり、大轟音とともに青白い鱗を閃めさせた大竜が狂舞を見せ北の山頂へと消えていった。そして湖の水は荒神の岡の東と西両端を破って一気に南へ流れていった。七月七日竜天は天に去り、今まで湖の底だとこの二野はひらけ、神の怒りに触れることなく嵐に襲われることもなくなった。村には平和と喜びの日が続いた。この時からだれ言うともなくこの土地を、竜の住んだ野「竜野」といい、流れる川を「天竜」というようになった。今も荒神山の北の岡の松とすすきの茂る中に、梨恵が竜の昇天を見た跡が秘められているという。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.293-295.						○竜野 ○天竜川							○湖の主=竜(移動) ○自然現象=竜の昇天(七月七日) (類似伝説) ・明神山の大蛇(清内路村)大蛇の最後が七月七日に起こり、その後人間を災害から守ようになる。 ○地名に託された災害	D644	8	
17	辰野町 小野	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○岩掛石 「橋沢街道沿いにある。日本武尊が東征の帰途に休まれたて、わらじの紐をしめなおしたといわれる一坪大の石。窪みには常に水が溜まり、水が絶えたと雨が降るという。(郷土資料)」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1416.	○岩掛石 「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1416						○岩掛石						○雨乞い伝説(石、日本武尊)	D614	7	
18	辰野町 小野新田	1500年頃 室町時代明応の頃	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○一本松の伝説 「小野村の南方新田という所に一本の独立している松があった。田雨中の三州街道筋にあったが、現在では枯れて残っただけ。今も500年ばかり遡ると当時、小野川は今の流れと場所を違えているが、小野でさえる川は差し、田畑を流すことが度々であり農民は困っていた。時の庄屋が何かの祟りだといひ、これを鎮めるために一本の松を植えた。それから川も氾濫することはなく、豊年が続いたという。昭和十年に伐った時、木の中に五斗も水が入っていて、その後大水がでたので村人は後を絶えないよう松を植えるという話があるが、今だに植えていないという。(小野一夫、第五三号、S37.7.2)」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.232.							○一本松						○ご加護があった災害 ※平成18年豪雨災害の時、近くの飲み川・小野中村で土石流が発生している。	D638	7	
19	辰野町 (赤坂沢)	江戸時代末期頃	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○蛇ぬけの穴 「赤坂沢の人悪沢にある淵に三百年も生えている杉の木のように太くて長い一匹の大蛇が棲んでいた。大蛇は穏やかなたけで人の前にはめったに姿を現さなかった。村人は、横川川の上の沢に棲んでいるから川を守ってくれていると信じ、淵にはめったに立ち入らなかつた。ある年長雨が降り、二十日間も振り続いた。川の水が何十倍にもふくれがあり、大蛇の棲む淵も地面がドツク崩れた。その時さすがの大蛇も川の中に投げ出され、のたうちまわったが、隠りくつった横川川へ飲み込まれ、真っ黒い水や大岩と一緒にすい勢いで押し流されていった。次の大雨がうそのようにビタリと止み、空はカラリと晴れあがった。村の衆が入悪沢の淵まで来た時、地面の滑った後にポツカリとあった大蛇の巣穴を見つけた。村の田畑はひどいめにあったが、村人は誰も流さなかった。大蛇が身代わりになってくれたと思った。それからこの辺りでは大雨が降ると、蛇ぬけするほどの大雨にならんといひがな、と言うようになったという。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.256.													○淵の主=大蛇(身代わり死亡、人間の味方) ○身代わりになった入悪沢の淵の大蛇	江戸 末土 砂- D639	8	
20	辰野町 横川	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○蛇石 「昔千洲には、五十間を渡るほどのたいへん気のやさしい蛇の大蛇が一緒に棲んでいた。その頃、大流沢に棲んでいた二匹の兄弟竜が、ときどき暴れては大嵐を呼びおこして大水を出し、村人を苦しめていた。兄弟竜は獲物のイノシシをめぐって大ゲンカをはじめたので、大嵐となった。木が倒れ、山が崩れ、大水が出て土や石や倒れた木々がゴロゴロと横川川を流れていった。千洲に棲む大蛇は川下の人間たちを思い、子供の竜に淵の底にいるよう声をかけたら、上流へと向かった。ひときり川筋の狭まった辺りまで来ると、倒れた木々に運き止められて小さいダムが出来た。大蛇は頭をもたげて出来たばかりの木や石の土手を崩しはじめたが、次々に木や石が流れてくるので苦しい水との闘いとなった。大蛇の子は帰って来ない母を心配し、傷をおいながら頭をもたげ続けている母蛇を見つけた。大蛇と子供は長い間水と闘っていたが、嵐が降る頃、とどろきとどろきと川底に半分埋まり、寄り添うように息をひきとってしまった。熊野権現様は兄弟竜のいたずらを大度怒り、竜たちを大流沢にある大滝に閉じ込めてしまった。村人たちは命をすてまで助けてくれた大蛇たちを大層あわれがり、いつまでもその美しい心が残るようにと、石の姿に変わったという。こうして、大小二筋の蛇石が横川川の川底にでき、いつまでも村人を守ってくれることになったという。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.256-260.	○蛇石  (http://www.geocities.jp/hoichichiroe/ta-hu/saburu/paisi.htmより)							○蛇石(圓の天然記念物)						○淵の主=親子大蛇(身代わり死亡、人間の味方) ○自然現象=龍竜 ○地物に託された災害伝承 ○滝の主=兄弟竜(生存、人間を苦しめる)	D640	8

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 画、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
21	辰野町 横川 門前地区	1753年 宝暦三年	民話・伝説・ 書話 (その他)	○上横川神社の神楽の由来 「宝暦三年(1753)、川島の谷では田植えが無事に終わった。ところが、春から一滴の雨も降らなかった。夏になっても雨は降らず、横川も一筋の細い糸のような流れになった。水がすっかりなくなり、田はひび割れ、食べ物も底をつき始めた。そのうちにはやり病が村人に蔓延しかかった。この凶事を神様の祟りと思った村人は、お伊勢様にお願ひしようとする人達を伊勢への旅にだした。伊勢神宮にたどり着いた二人は一心に祈り、神官に村の事情を伝えた。神官の紹介してくれた又右エ門と七之丞という神楽師ともども村に戻り、一軒一軒お払いをもらった。村人達は神楽師の後をぞろぞろとついて歩き、一緒になって天にお願ひをしたり、自分のことのように喜んでいたりした。願ひが通じたのか、その日の夕方から大粒の雨が降り出した。平和で静かな村がよみがえり、村にとまどう神楽師達にお願ひした。しかしその願ひは聞き入れてもらえなかったが、神楽師達は川島にし獅子舞を残し、獅子舞のやり方を伝えていった。こうして獅子舞は二百年以上も毎年毎年行われ、代々伝えられてきた。今では上横川神社神楽保存会の人々が、後代に伝えるよう努力している。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.278-284.	○上横川神社の神楽 (http://www.town.tateyama.nagano.jp/bunkazai/top.html)												○ご加護のあった災害(旱魃) ○祭りに継承された災害	1753- D841	7
22	辰野町 宮所	—	民話・伝説・ 書話 (その他)	○百々湖の沈鐘 「上辰野と宮所間の横川河の百々橋下に大きな湖があり、そこを昔から百々湖といってきた。昔この湖の上にはお堂があり、長い年の間に荒れて、ついにお堂は湖に崩れ込んでしまった。このため、お堂の釣鐘が一緒に湖に沈んでしまった。沈んだ鐘は大蛇になり、湖の主になって人がそばに来ると巻き込んでしまうという。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.292-293.					○百々湖							○湖の主=鐘=大蛇(生存) (類似伝説) ・洞ヶ入鐘樓堂(辰野町平出)	D843	8	
23	—	—	民話・伝説・ 書話 (土砂)	○洞ヶ入鐘樓堂 「上平出部落の南端、地名大門を東の山の谷間に入ること約二町、山の中腹に鐘樓堂があった。昔、そこから山坂けをして鐘樓堂は泥砂と共に押し流され、鐘樓は天竜川の百々の湖にころひこんで大蛇となり、湖の主になったという。(長野県上伊那誌 民俗編上より)」	○「天竜川の災害伝説」pp.17-18.												○湖の主=鐘=大蛇(生存) (類似伝説) ・百々湖の沈鐘(辰野町宮所)	D805	2	
24	辰野町 平出	—	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○八王子神社の伝説 「昔々、八王子神社は素戔鳴尊という神様が便りにしていた八人の御子がなくなりなられ、神として祀られたという。大吉に平出、下辰野地区はすべて湖水になっていて大蛇が棲み、辰の湖といった。東側の樋口地区は水門の役割を果たしていたが、大水のために破られて湖も次第に濁れ果て平野になった。その後、この地方には毎年伝染病ではげしい熱病が流行し、人々は大蛇の祟りと恐れ、八人の御子の霊を祀って無病をお祈りしたところ、病氣は忽ち治ったという。」	○「辰野町の誕生と伝説」 pp.304.	○八王子神社 「辰野町の誕生と伝説」pp.304.			○八王子神社	○平出 ○辰の湖 ○樋口								湖の主=大蛇 ○地名に託された災害	D845	2
25	—	—	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○腰掛石 「有賀峠へ登る道の平出のはずれの傍に、むかし明神様を勧誘するときに御輿をこまごまかついで動かなくなり、石の上に置いて休んだという石がある。昔てその傍を流れる上野川が氾濫した時、この石に覆がれて水の方向が変わったため、平出の村はほとんど害を被らなかったという。(郷土 石号)」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1417.					○腰掛石								○地物に託された災害	D816	2
26	辰野町 荒神山	—	民話・伝説・ 書話 (その他)	○辰野のいわれ 「むかしの荒神山は今より大きく、東と西の山脈までつながっていて、天竜川をせきとめ、そこに湖ができていた。その湖には竜神が住んでいて、天に昇ったり降りたりしていた。ある時の大雨で湖の水が氾濫し、荒神山の東と西を切り崩して水が流れ出し、干上がったしまった。水がなくなったので竜は天に昇ってしまい、今は湖がなくなりました。ここを竜神がいたことから龍野(辰野)というようになった。」	○「上伊那文化大辞典」pp.632.					○辰野(龍野)								○湖の主=竜(移動) ○地名に託された災害伝承	D533	8
27	辰野町 滝底 (堂平)	—	民話・伝説・ 書話 (土砂)	○沢底の蛇の池 「沢底の山寺の堂平という所に蛇の池とよぶ小さい屋敷の池があった。昔に大蛇がすんでいたが大雷雨で山坂けした時、一緒に流れて行方が分からなくなった。池から七、八間はなれたところに蛇抜けといつて蛇の抜け出したあとがあるという。この池を掻き回すと雨が降るといって、誰も昔から手を出したものがいないという。」	○「天竜川の災害伝説」pp.16-17.					○蛇の池 「辰野堂平付近。」								○池の主=大蛇(移動) ○平成18年7月豪雨災害の時、沢底川の岸辺にある赤羽(山寺より下流)というところで土石流が発生した。	D604	2
28	箕輪町	—	ことわざ	(箕輪町に伝わることわざ) ○辰野の汽車の気音が聞えたと雨 ○天竜川を虹がまたぐと雨 ○雨つぶ(ぼたるぶくろ)をとると雨 ○かぼちゃのつるが太いと風が吹く ○山かかしがると雨、育だいしようが出ると雨 ○蚊がもちをつくと雨 ○ひじろの煙が家の中にこもると雨 ○腰がいたむと、あかぎれがいたいと、しもやけがかいいと、神経痛がおこると、どれも雨 ○子どもがお茶をのむと風がふく ○めだかが群になって泳げば雨	○「箕輪町誌自然・現代編」 pp.70-72.												○箕輪町に伝わることわざ	D594	8	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
29	箕輪町 三日町	1868年 明治元年	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○夢枕に立つくらがり沢の大蛇 「澄心寺の繁仙和尚の夢枕に妙齡の美女に化身したくらがり沢の大蛇が立ち、天に昇るために山から天竜川へ移動し千年住まなければならぬと言った。大蛇は、澄心寺や下の田畑村人には決して被害を与えないと誓い、沢をくぐって通させてくれと一生のお願いをして帰った。夢からさめた和尚は、くらがり沢の入り口に石を伏せ鏡を覗いて大蛇を封じ込めた。その通関後、大蛇は流れ込む河津へ抜け出したので、澄心寺は壁をぶち壊され、三百六十畳の畳の上に五尺から九尺の甘酒のような泥がなだれ込み、下に続く田畑も大きな被害を受けた。」	○「伊那路 第14巻 第12号」pp.24-25.					○曹洞宗 澄心寺 (〒399-4603 上伊那郡箕輪町大字三日町 289 / TEL: 0265-79-3057)							○沢の主=大蛇(移動、妙齡の美女に化身) ○恨み・怒りによってもたらされた災害 ○曹洞宗 澄心寺 (〒399-4603 上伊那郡箕輪町大字三日町289 / TEL: 0265-79-3057)	1868 洪水 D503	8
30	箕輪町 木下	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○帯無川 「弘法大師が帯を流して水を封じたので、水が下の方へ流れなくなったという。この西の山を雲が常に帯を巻いたようにかかっているところから帯巻山と呼んだ。その山から流れ出る川というので帯巻川と言ったのが、いつの間にか誤って帯無川というようになった。(笠原政市民)」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1429-1430.					○帯無川 ○帯巻山						○水を司る(弘法大師) ※H18年7月豪雨災害時(19日) 6.40 帯無川線路付近決壊の恐れ 9.15 帯無川園道西教員住宅付近決壊の恐れ(箕輪町ホームページ)	D617	8	
31	箕輪町 南小河内	—	信仰	○おさんやり(災遣り)の伝説 「昔から毎年お盆におこなわれる行事。村の南を通る田無川から上げて灌漑用水にしている大塚が村の中を南から北へと流れ、北から南へ流れる天竜川の流れと反対の所謂逆さ川であるため、そこから出る災厄から逃れるために始まったと伝えられている。昔、凶年に三年ばかり止めていたら疫病が大流行したので、怖れられてまた復活したという。」	○上伊那郡誌 民俗篇上」 pp.1430.											○災難よけの行事	D627	8	
32	南箕輪村 神子柴	1586年1月18日 天正十三年十一月二十九日 (天正地震)	民話・伝説・ 昔話 (地震)	○御射山社の破壊 「春日街道沿いの西側に、大きな落葉松が2本寄り添うように生えている下に「御射山社」と刻まれた石碑が建てられている。この場所には、大同四年(809)に坂上田村丸が天龍の勅命により建立した御射山社本社があった。451年後に再建されたが、天正地震(1586.1.18)の時に破壊され、その後243年間造営することができずじまい。そこで文政十年(1827)七月に由来を記した碑が建てられた。」	○「上伊那文化大辞典」pp.633-634.	○御射山様 「上伊那文化大辞典」pp.633.	○御射山社の由来を記した碑										○災害によって消滅した地物	1586 地震 D534	8
33	南箕輪村 大泉	1573年～1593年 天正年間	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○蛇塚 「むかし西箕輪の大番の耕地に住んで作物を荒らし、人々を恐がらせていた大蛇が、大泉あたりにも出没したため、時の領主保科弾正が家臣に命じて退治させ死骸を埋めたという。昭和の初期までは高く石が積み上げ、蛇がたくさんいたといわれるが、西天竜耕地整理のために取り除かれ、水田となってしまったが、蛇塚という地名が残されている。」	○「上伊那文化大辞典」pp.633-634.					○蛇塚 「大和泉神社の南側の道を春日街道を横切って東へ300mほど下ったところ。」						○耕地の主=大蛇(死亡) ○大蛇退治伝説	天正- D535	8	
34	伊那市 東春近六軒 屋	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○経塚 「六軒屋の崖ぎわに、小さな塚が点在していて経塚と言っていた。昔、洪水を防ぐために経塚して水難除けを祈願し、経を埋めたところという。以前四十八ヶ所あったというが、今は開墾の際崩されてその数が少ない。」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1425.					○経塚						○災害履歴の風化	D618	9	
35	伊那市 東春近	—	ことわざ	(東春近に伝わることわざ) ○北風が吹くと大水がでる	○「伊那谷 長谷村の民俗」 pp.30-32.										○東春近に伝わることわざ	—	D551	9	
36	伊那市 東春近 (殿島橋)	1693年～1936年 元禄六年～昭和十一年 (洪水)	治水・土木	○殿島橋の変遷 「三峰川奥地の森林産伐により洪水を招来し、氾濫原が拡大したことにより、元禄六年から昭和十一年までの240年間に殿島橋の長さが5倍になった。」	○「伊那谷 長谷村の民俗」 pp.30-32.					○殿島橋						○災害がもたらす町の変遷	1693 洪水 D504	9	
37	伊那市 西春近 下牧	1726年 享保十一年 (洪水)	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○鍛冶ヶ島流出と集団移住 「昔、現在の伊那市下牧の蓮災堤防から国道153号線との間に鍛冶ヶ島とよばれる島があった。鍛冶職人が多く住んでいたが、享保十一年(1726)の大洪水で高一四四二石の田と十四戸の家全部が流出し、住人は表木村(現伊那市西春近)へ移住した。鍛冶ヶ島新田家屋迄のころず流れつし、立つ所もこれなれば、本村へより所どころの野つれ、または環訪形原の街道路へ小屋がけいたし、田地これ無き者ども少々売り家等を致し一日を送り候仕合いに候て、本村との困窮。(殿島の大西家文書)」	○「天竜川の災害伝説」pp.9-10.											○災害による集団移住	1726 洪水 D596	9	
38	伊那市 東春近 田原	1868年6月26日 慶応四年五月七日 (辰満水)	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○移住した田原村新田の人々 「慶応四年(1868)五月七日から大沢川の押し出す大水と天竜川の増水が重なり、田原村新田の全戸に満水して家屋21戸・水田20町歩余が流失した。このとき、避難した人々のうち110戸が今でも薬師庵の裏山に住み、山組部落と称して石垣づくりの住宅を構えている。」	○「天竜川の災害伝説」pp.12-13.											○災害による集団移住	1868 辰満水 D599	9	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 画、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え、言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
39	伊那市 東春近 田原	—	治水・土木	○天龍川改修記念碑 「昭和22年6月天龍川が直轄編入され、最初に着手された ところに建てられた記念碑である。」	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.614 	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.614	○築堤記念碑 187K										D708	9		
40	伊那市 西春近 表木	—	治水・土木	○修堤碑	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.614 	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.614	○築堤記念碑 188K											D709	9	
41	伊那市 福島	安政二年	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○福島九頭竜碑 「堤防裏面に設置されている九頭龍神。」	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.612 	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.612	○九頭竜碑 198.4K+100											D703	8	
42	伊那市 (船着場)	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○伊那天財天宮 「天龍川の船の交通の盛んなり頃の船着場、川の流れ の平穏と舟交通の安全を祈願して祀られたものか。」	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.612 	○「天龍川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.612		○弁天・弁財天										D704	8	
43	伊那市 伊那郡 下新田	1647年6月～7月 正保四年五月 (洪水)	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○般若島 「寛永元年(1624)に大峯山行者の慶芳院不源という者 がこの地に堂宇を構えた。正保四年(1647)五月の洪水 のおり堂宇が流されそうになった時、般若経をよびとびに 読んで流失を免れたという。ここから般若島と名づけられ た。」	○「上伊那文化 大辞典」pp.636- 637 ○「天龍川の災 害伝説」pp.6.					○般若島 「下新田の南 方、三峰川の下 流で石のごっこ つした河原。」								○地名に託された災害 ○ご加護のあった災害	1647 洪水- D509	9
44	伊那市 伊那郡 狐島	1744年 延享元年 (洪水)	治水・土木	○境界紛争と見通し桜 「天龍川と三峰川の合流する付近一帯は、洪水の度に川 筋を変え、川筋を採んだ地区の境界紛争が絶えなかつ た。江戸時代の270年間で90回も洪水と濁水を引き起こ し、狐島村と対岸の荒井村・西町村では、延享元年 (1744)の出水時に決めた約定書と絵図面がある。その絵 図面には、境界を復元するための八面所の測量基準の 一つに「長右衛門社木校」が記録されており、現存する唯一 の基準となっている。」	○「天龍川の災 害伝説」pp.10. 	○見通し桜 (http://www.geocities.jp/viewpoint2006/viewpoints/ma041.html より)												1744 洪水- D597	9	
45	伊那市 美嵩 (青島)	1899年～ 明治32年～	治水・土木	○青島堤防 「天明年間(1781～1788)に藩によって築かれた御見通し 川除が青島耕地を守っていたが、明治元年(1868)、明治 15年(1882)、明治18年(1885)の大洪水により、青島耕地 地区は大打撃を受けたため、関係地元民が集まり築堤計画 や施工計画を立案した。さらにその費用も調達して県より 許可を受け、地元の責任により施工する方法をとった。橋 爪定太郎を中心とし、明治32年(1899)に堤防が完成し た。」 「大正12年(1923)、橋爪与四郎、北原繁雄両氏が率先 し、青島堤防保存会を結成し保存に努めた。美嵩村でも 昭和26年(1951)に美嵩村堤防保存会を組織し、水防資材 保存庫を整備したり、常時堤防を見回り危険箇所の改善 に努めた。」 ○北原式伸縮式鉄線じゃこの発明 「美嵩の中の原の用水路を私財をなげうって完成させた北 原平八郎の孫である北原繁雄氏が、三峰川の洪水復旧 作業の仕事の中で、伸縮式鉄線じゃこを発明した。」	○「第7回三峰 川フォーラム記 布資料」 	○青島堤防 川フォーラムの 叢 堤												○災害に挑む人々の姿 ○水防技術の継承	1899- D518	10

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
45	伊那市 美嵩 (青島)	1899年～ 明治32年～	治水・土木	○青島住民の水防技術の継承 「36災害の時、聖牛(うし)入れに関して、青島住民が自衛隊を指導した。」 ○耕土の深さ 「川向こうの畑作地の河南村から来たお嫁さんがおじいさんと田の草を取って、お茶の用意に田んぼから畦にあがったところ、足の泥を落としてから上がるよう注意された。それほど耕土が浅く、土が貴重であった。」 「耕土が極めて浅いため、トラクターの爪が三年で磨耗した。」 「堤防の切れ目(露堤)から大水の時は水がゆっくりと逆流してくる。そのとき土が堆積して耕土が深くなった。」													○災害に挑む人々の姿 ○水防技術の継承	1899- D518	10
46	伊那市	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○草餅地蔵 「伊那市にいつの頃から三峰川の大満水の時、奥の方の村から石地蔵が流れてきた。水がひけてから村人が見つけ、この地に祀ったという。願い事が叶うと年の数だけ団子をあげる。四月二十四日の縁日では、村の人たちは草餅をあげる。」	○「天竜川の災害伝説」pp.13-14.			○草餅地蔵									○災害がもたらした地物	D602	9
47	伊那市 高遠町 藤澤 (御堂埜外)	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○おや子石 「ずうとむかしのこと、大地震で地山が崩れて土砂がどどっと押し出した。地山に住んでいたおや子の山犬がおつたまげて逃げ出した。御堂埜外まで来た時、父犬は藤澤の蛇返りに押し流されて石になった。母犬と子犬は半食まできてびったりと座り込んだまま二つの石になったという。それらの石は今はない。」 ○犬石 「昔、地山が押し出したとき、大石・犬石・小犬石の三個の犬石が唄いて逃げた。大石(観石)は強いので地山のすぐ下に止まり、女観石は500メートルほど離れたところに止まり、子供石は3キロメートル離れた長藤村の中家という所に止まったという。」	○「天竜川の災害伝説」pp.18-19.						○おや子石 ○犬石						○災害によってもたらされた地物 ○地物に託された災害伝承	D606	2
48	伊那市 高遠町 藤澤 (御堂埜外)	—	文芸・民謡・ 詩	○「地山おしだず 犬石ほえる。ないてにげるは、子つれ石。」	○「天竜川の災害伝説」pp.18-19.												○歌に託された災害伝承		
49	伊那市 高遠	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○高遠弁財天 「河中の天然石の上に祀られている弁財天様。過去の幾多の洪水にも流されたことがないという。岩は自然の量水漂の役目もしてきた。」	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.612				○弁天・弁財天								—	D705	3
50	伊那市 高遠町 藤澤片倉	—	信仰	○守屋山(モリヤマサマ) 「伊那と諏訪の境にそびえる守屋山には、守屋大神の石の祠が祀られている。山中で乱暴すれば山が荒れるといわれ、守屋山の頭に雲のある時は必ず麓の村々に雨が降るといわれている。」	○「上伊那文化大辞典」pp.642.			○守屋大神の石の祠									○モリヤマサマ信仰	D540	2
51	伊那市 高遠町 勝間	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○守屋貞治の大聖不動明王 「高遠を流れる三峰川は、たびたび洪水をおこした。その氾濫を鎮めるために、水切り不動として建立したのか、高遠町勝間の常盤橋西側に全長1.5mの大聖不動明王がある。作者は高遠石工の守屋貞治で、最高傑作の一つといわれている。」	○守屋貞治の石仏 (http://www.1kon.ne.jp/~yoshikatu/sadajihime/)			○大聖不動明王									○水難除けの石仏	D601	3
52	伊那市高遠町西高遠多前 (天女橋)	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○米高岩 「天女橋の下にある。三峰川の水がその岩に当たって流れる年は、お米の値段が高いという。」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」pp.1422.			○米高石									○水位の変化による洪水予知	D619	3
53	伊那市 高遠町	1868年7月6日 慶応四年五月十七日 (辰満水)	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○西向庵の十一面観音 「慶応四年五月十七日(辰満水)の時、西向庵のお堂が激流に吞まれる寸前、村人2、3人が身体を腰縄を大きな柏の木にしばりつけ決死の覚悟でぐらついている堂内に飛び込み、本尊の十一面観音と釣鐘を運び出した。」	○「天竜川の災害伝説」pp.13.												○決死の覚悟で運び出した本尊と釣鐘	1868 辰満水- D600	2

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え、言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
54	伊那市 長谷	—	ことわざ	(長谷に伝わることわざ) ○夕方地震があると日干が焼く ○露の果が低い場所にある年は大風が吹く ○水こい鳥が鳴くと雨が降る ○西騎へ雲が出るとうしろに雨 ○中庭四沢がなると雨が降る ○煙草の香りが良いときは雨が降る ○蟻が巣を持ち上げると雨が降る ○女沢雨はこわくない ○北の入りに霧が入ると雨 ○雨蛙がなくと雨が降る ○雷が耳を越して頭を洗うと雨 ○戸倉へ霧がかかれば雨 ○和泉原の平へ霧が降りると雨 ○釜無(釜無山)へ霧がはいると雨が降る ○大風の吹くとき、羊の先へ鎌をしばりつけて、屋根横へ立てれば風除けとなる ○水柱、水内梁、雪の析、雨の垂木に露の昔き草と唱えらる。 ○火の夢は水出、水の夢は火事がある	○伊那谷 長谷村の民俗」pp.283-284.											○長谷に伝わることわざ	—	D544	3	
55	伊那市 長谷	1870年1月2日 明治二年十二月一日 (飯満水)	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○入野谷騒動 「慶応二年(1866)から凶作が続き、明治元年(1868)の五月と八月におこった洪水(飯満水)により、天明・天保に次ぐ凶作となった。また、明治新政により急激に経済の情勢が変動し、物価が高騰したため生活は困窮を極めた。木師郷の五力村(市野瀬・中尾・杉島・黒河内)においては、藩に対して用木の上納と年貢の上納をゆるめてほしいと嘆願したところ、聞き入れてもらえなかった。とうとう明治二年(1869)十二月一日の夜、不満が一度に爆発し一帯が勃発した。その結果、藩は入野谷全体に対して上納の延期を認め、騒動は三日の夕方に治まった。」	○信州伊那 入野谷の伝承」pp.193-195.											○災害がもたらした紛争		1869 洪水- D529	3	
56	伊那市長谷 市野瀬浦	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○風穴 「浦村に風穴といひ伝ふる所あり、前浦奥浦の間の尾先に松枯茂りたる森の内に、屈曲の岩重なりたる中に常に風を生ず。此岩を動かし或いは穴を見んとすれば、必ず大風吹きて荒れる。よって里民制して辺りへ寄ること禁す。此岩の上に風穴大明神という祠あり、この穴の口へ鼻紙を置けば今も空へ吹き上がるぞ。(木の下隆 巻之下)」	○長野県上伊那郡誌巻五巻 民俗篇上」pp.1423.					○風穴							○風の神様		D620	3
57	伊那市 長谷 市野瀬	1842年 天保十三年	治水・土木	○粟沢川の河川工事 「むかし粟沢川は市野瀬部落の中を流れていた。この川は洪水になるとしばしば氾濫し、部落は被害を蒙っていた。天保十三年(1842)に城山の南の尾根を掘りぬいて切り通しを造り、粟沢川は市野瀬瀬となって三峰川に流れ落ちるようになった。これにより、部落は災害から免れるようになり、田んぼの数も相当に増えたという。」	○信州伊那 入野谷の伝承」pp.183-184.												○災害に挑む人々の姿		1842- D528	3
58	伊那市 長谷 市野瀬	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○戸倉沢埋外の市野瀬城跡 「むかし戸倉沢埋外(市野瀬の西南のはずれ、粟沢川と熊堂川の合流地点)には、市野瀬城があったと伝えられている。今は粟沢川や熊堂川の洪水のために、一帯が荒れ果ててしまひ、草に覆われた小高い丘となっている。その丘の一角には、一基の宝篋印塔が埋もれている。」	○信州伊那 入野谷の伝承」pp.183-184.					○戸倉沢埋外の市野瀬城跡							○災害によって消滅した地物		D545	3
59	伊那市 長谷 (赤河原)	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○赤河原 「おおむかし、戸台川(伊那市長谷黒河内)の上流に一匹の大蛇が棲んでいた。時々里に出てきては危害を加えていたので、里の人たちは毎日恐れおののいていた。そのころ、日本武尊が、景行天皇のご命令によって東國の悪者退治にでた帰りの途中、入野谷に立ち寄り、悪い大蛇の話を聞いた。尊は戸台川上流の河原で大蛇を見つけ、ご自慢のお太刀をふるって大乱闘の末にこの大蛇を見事切り殺した。このとき、大蛇の切り口から物凄く勢いで血潮がふきだし、そのあたり一帯の河原を真っ赤に染めた。それ以来、河原の石はどれもみな真っ赤になっていて、その河原を赤河原と呼ぶようになったという。」 ○三峰川の七石 「戸台川上流の大蛇が日本武尊に切りつけられた時、断末魔の苦しみから広い河原中をのたうちまわった。あたりの大地はとどろきゆるぎ、大蛇の大きな七色の鱗が火花のように空高く散らばって大きな虹をつつた。きれいに大空を彩った七色の鱗の虹は、やがて流れ星のように尾を引いて三峰川の瀬となっている南アルプスの谷々に散り散り落ちた。現在三峰川にある七色の石は、このとき飛び散った大蛇の七色の鱗であると云われ、人々は三峰川の七石と呼んでいる。」	○信州伊那 入野谷の伝承」pp.143-146. ○上伊那文化大辞典」pp.642.					○赤河原 「南アルプス登山口戸台から戸台川を約8キロさかのぼった東駒山麓の付近。」	○三峰川の七石						○川の主=大蛇(死亡) ○地名・地物に託された災害伝承 ○大蛇退治伝説		D527	3
60	伊那市 長谷溝口	1394年以前 応永以前	信仰	○熱田神社(長谷溝口) 「名古屋の熱田神宮から勧請してもらい室町時代以前に建てられていたとされている。日本武尊が、赤河原の地で大蛇を切り殺した後、大蛇の頭を携えて溝口の里に来、衆の大蛇の下に行宮を造り、その傍らに大蛇の頭を埋めて里の患いを取り除いたという。」	○上伊那文化大辞典」pp.642. ○熱田神宮 (http://www.nhk.or.jp/nagano/entr/taun/05/060118.html#J5)					○熱田神宮							○主の吊い ○日本武尊を祀った熱田神宮		D541	3

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号				
					形式知					暗黙知											
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版物	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習		
61	伊那市 黒河内	—	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○黒河内長者屋敷 「大橋寺へ登る門坂の上に住んでいた長者の美しい一人娘のところに、毎晩訪れる美青年がいた。その美青年は戸倉山の池に住んでいる大蛇の化身だというわががた。娘は確かめようと、男の着物の裾に針を刺して帰らせた。次の夜、男は現れず、天地もどろくほどの雷鳴と大暴風雨に変わり、怒ちのうらに三峰川が洪水となった。翌朝、大蛇の屍が激流に流されていく姿が見られた。」	○伊那谷 長谷村の民俗 pp.283-284.												○池の主=大蛇(死亡、美青年に化身) ○自然現象=大蛇の悲しみ・怒り ○曹洞宗 大橋寺 (〒396-0403 上伊那郡長谷村 大字黒河内358 / TEL.0265-98-2144)	D505	3		
62	宮田村	—	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○無縁仏 「大田切川の岸辺に、俗に無縁仏と呼ばれる石仏群がある。昔からこの川の洪水によって死んでしまった旅人の霊を供養した石仏と伝えられている。」	○「天竜川の災害伝説」pp.14.			○無縁仏										○犠牲者への弔い	D603	9	
63	駒ヶ根市 東伊那	—	民話・伝説・ 書話 (その他)	○高鳥谷山(たかすやま)の伝説 「往昔、良沼村北林にいた井上掃部という地侍が、一日山野に入り猟をしていた。すると、熊鷹が立ちまわって大地を覆い、大雨が激しく降り出したので待合棚を見失ってしまった。二昼夜野宿し、精神が朦朧とするにいたり、無事に帰れた時は高鳥谷山の絶頂に一社創建すると猿田彦命に信願したところ、雨がやみ目の前に山鳥が現れた。これを捕まえようと跡を追っていくといつか我が家(とどろき)で居ることができた。侍は神願の霊感を感じ、山頂に高鳥谷天狗(猿田彦命)を祀り神殿を営むようになったという。」	○「上伊那文化大辞典」pp.639.	○高鳥谷山山頂の石造 (http://www.orientation.com/~cluboup/2007/report/2007_0728/index.html#3-3)			○高鳥谷神社									○猿田彦命のご加護	D537	3	
64	駒ヶ根市 駒ヶ岳	—	民話・伝説・ 書話 (その他)	○濃ヶ池 「駒ヶ岳の主が棲んでいて、荒らせばたちまち雨が降るといふ。昔、駒ヶ岳の麓の内の萱という部落に母親と二人きりで暮らしていた娘が、大蛇の化身であった若者の後を追ってこの池に身を投じ、若者は竜に、娘は鬼と化して池に棲むようになったという。濃ヶ池とも称し、干天にこの池に登り雨乞いをすれば効験が有るといふ。」	○「上伊那郡誌」民俗篇上 pp.1440-1441.						○濃ヶ池							○駒ヶ岳の主=(竜・鬼、生存) ○雨乞い(池)	D628	9	
65	駒ヶ根市 小鍛冶	1615 元和元年	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○小鍛冶の矢文 「元和元年(1615)酒井新左衛門二男左太夫と、家来の庄右衛門が大坂夏の陣に出陣し、左太夫は戦死した。庄右衛門が帰郷の際に天竜川が増水しており、やむなく河津の小鍛冶より矢文にて次男左太夫の戦死を主家に報じた。明治17年、18年頃までは洪水のおりに、実際に矢文で通信を行っていたという。」	○駒ヶ根市誌 現代編下巻 pp.596-597.													○洪水時の情報伝達手段	1615 洪水- D647	9	
66	駒ヶ根市 (赤穂小鍛冶と中沢穴山の間)	—	民話・伝説・ 書話 (洪水)	○浮島の伝説 「天竜川の赤穂小鍛冶と中沢穴山の間に浮島と呼ぶ塚があった。中央に水神様が祀られ、周囲には赤松5、6本が立ち、川の水がどんなに増水しても沈むことがなかったという。昔、東の山から鹿が出て、付近の人々が捕らえて皮を剥いだところ、子を腹に宿していた。衰れに思った里人が、その袋子を浮島へ埋めた。母鹿は小鹿を溺れさせまいとして、満水の時には島を浮かせさせたという。昭和初期に吉瀬ダム構築によって年々河床が上昇し、現在は河床に埋没してしまった。」	○「上伊那文化大辞典」pp.639.			○浮島の水神様											○浮島伝説 ○ガムの河床上昇による埋没	D536	9
67	駒ヶ根市 中沢上割	—	民話・伝説・ 書話 (土砂)	○落石 「昔、天から落ちた石が林の中にあつてそこに落石神社を祀った。母乳が出ないとき、この石にお乳をし、石に生えている苔を煮じて飲めば、乳の代わりにするといふ。(中沢伝説集)」	○長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上 pp.1419-1420.													○地変による地物の由来	D623	3	
68	駒ヶ根市 中沢	—	災害の事 業・災害林 験・罹られた 教訓	○復興記念碑	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.614	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.614													—	D710	9
69	駒ヶ根市 下平	1691年6月~7月 元禄四年六月 (洪水)	治水・土木	○大田切川の川除林 「元禄四年(1691)の五月の霖雨、六月には天竜川に洪水があり、伊那谷に大きな被害がでた。この年、大田切川と天竜川との合流点に二十数歩にわたって植林がされた。長さ七百間・幅百間は戦後まで残存したが、現在は伐木開墾されて水田地帯に変わり、県立西駒郷ほかの施設中にわずかに松林の面影を留めている。」	○「天竜川の災害伝説」pp.7.						○大田切川の川除林								○水防技術の継承	1691 洪水- D590	9

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
70	駒ヶ根市 大久保	1789年 寛政元年 (洪水)	治水・土木	○阪本天山の豊田の碑 「寛政元年(1789)天竜川の大氾濫により、大久保の辺り一帯は荒地と化した。中村新六は阪本天山につき実業を修め、天明の飢饉に発奮し、隣道を穿ち堤防を築き、数町歩の美田を開くという大業を成し遂げた。その功績をたたえ建立された碑には、大窪郡中野氏豊田磯記天山真逸源俊並撰、と碑文が彫られている。碑は花崗岩で現在風化が進み文字の判読はできない。」	○「天竜川の災害伝説」pp.11.		○阪本天山の豊田の碑 「東伊那大久保さがり松、塩田川の河口にある。」										○災害に挑む人々の姿 ○治水事業の功績を讃える碑	1789 洪水- D598	9
71	飯島町 飯島壺岡	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○仏石 「昔、山から流れてきた位牌が乗っていた岩だという。大きな岩で、現在稲荷神社が祀ってある。」	○「長野県上伊那郡誌第五巻 民俗篇上」 pp.1420.												○災害によってもたらされた地物	D621	9
72	飯島町 本郷	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○隅の木 「隅の木と称す栗の木があった。正徳五年未満水の時、与田切川が氾濫し、沿岸の田家が堰ね流出してしまった。人々はわずかに身を以て免れ、隅の木の陰に集って危険を脱することができたという。この隅の木の老朽化が進み伐採することになった時、その恩を記すために隅の木碑が建立された。」	○「飯島町誌下巻現代・民俗編」pp.1104.	○隅の木碑 「飯島町誌下巻現代・民俗編」pp.1104.	○隅の木碑 「本郷第6、米山金夫氏宅の東側」										○ご加護のあった災害(洪水)	D629	10
73	飯島町 本郷	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○鬼の島・鬼の的 「与田切川の吐き出しに、鬼がもつて土を担ぎ空け出したら出来た島と、もつこどんと払ったら小さな島ができたという。また、駒ヶ岳に住んでいる鬼神が、ここに標の置いて山頂より弓を引いて當ったと言い伝えられている。」	○「飯島町誌下巻現代・民俗編」pp.1107-1108.	○鬼の島・鬼の的 「○飯島町誌下巻現代・民俗編」pp.1108.											○鬼がもたらした地変	D630	10
74	飯島町 中平	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○中平の水神碑 「今でも年々ささやかな祭礼が行われ大事にされている水神様。」	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」 pp.611	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」 pp.611											—	D701	9
75	中川村	—	ことわざ	(中川村に伝わることわざ) ○東夕立(東山からの雷雨)は来そうでないが来ればどっかい ○霧山に霧が立っている内は雨は止まない	○「中川村誌下巻近代・現代編 民俗編」pp.702.												—	D568	10
76				信仰	○座頭なぎ 「昔、座頭が数人で京へ上る途中、なぎ前れにあって悲惨な死を遂げた。山の木を切ることがなぎ前れの原因であると、再びこのような惨事が起こらないことを願って、座頭なぎの松伐るべからず、との申し合わせが遺言として残されている。」	○「中川村誌下巻近代・現代編 民俗編」 pp.696-697.												○災害教訓の伝承	D636
77	中川村 片桐田島	1750年 寛延三年	治水・土木	○理兵衛堤防 「田島村の名主松村理兵衛忠欣が、度重なる天竜川の水害から田島を護るために私財をなげうち、尾張から石工を呼んで堤防工事を始めた。工事中に何度も水害に足踏われ、至難を極めたが、理兵衛の孫の三代に渡り58年間と3万両もの莫大な費用をかけて堤防が完成した。平成18年7月豪雨の際、洪水の跡に理兵衛堤防の石積が発見されている。」 ○天流功業義公明神碑 「理兵衛の功績を讃え、文化十二年に建立され水神様として祀られている。」	○「上伊那たずねある記」 pp.132-133. ○「図説・上伊那の歴史上巻」 pp.129.	○理兵衛堤防、 安政五年(1828)川国役曹掛絵図、天流功業義公明神碑 「図説・上伊那の歴史上巻」 pp.129.	○天流功業義公明神碑(水神様)										○水害に挑んだ人の姿と功績	1750- D626	10
78	中川村 大草美里	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○黒牛の風穴 「中川村大草美里(黒牛)地籍の風穴という所に、風三郎と呼ぶ風の神が祀られている。風の神が嫌っている神楽の獅子や越後獅子が宮の入敷より奥へ登ったならば、たちまち暴風を巻き起こすと伝えられている。駒ヶ根市大御食神社の神代文字によって書かれた社伝記には、五悪夜にわり吹き荒れた暴風雨を黒牛の風の神の祟りであるとして祭り続けたことが記されている。」	○「上伊那文化大辞典」pp.640.												○風の神様	D539	10

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 画、旧図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構、要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
79	中川村 大草	1615年 元和元年	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○石神の松 「昔、釜ヶ淵に天竜の主である九頭竜(大蛇)の化身とい われる大きな龍が住んでいた。ある年の洪水で、淵の外 に跳りでて溺れて死んでしまった。里人が屍骸を今の石神 の地に厚く葎り、塚を築いて水神として祀った。」 「この石神を息をしないで七回りすると青坊主が現れてく るのが見えるという。」 「元和(1615-)の頃、天竜川の氾濫に相次いで悩んでいた 農民が、常泉寺に尊皇し法力を持っていた山伏に頼っ て水難除の祈禱をしてもらった。山伏は21日間祈願を続 け、満願の日に精魂尽きて倒れた。そして死に先立ちこの 水神に手植の松を手向けたという。山伏の遺骸は、約5・ 60m離れた北東の段丘上に葬り、祠を立てて行者さまとあ がめた。(山伏塚) 「昔、石神坂を上下するものは皆石上の松に小石を手向 けて足の疲れを癒したという。」	○「写真集 上 伊那の文化財」 pp.244-245。 ○「上伊那文化 大辞典」pp.639- 640。 ○「天竜川の災 害伝説」pp.14- 15。		○石神の松 「写真集 上伊 那の文化財」 pp.245。	○石神の松の 水神様	○山伏塚			○石神の松「赤 松の雌株、高約 6m周囲5.5m、現 在では道路工 事等により、切 り崩された。」			○山伏塚にまつ わるお祭り「仲 林部落の人々 が年々4月に行 う。」			○淵の主=大蛇・九頭竜(死亡、 龍に化身) ○犠牲者への弔い ○曹洞宗 常泉寺 (〒399-3801 上伊那郡中川村 大字大草5151/TEL. 0265-88- 2024)	1615 洪水 D506	10
80	中川村 飯沼	—	信仰	○天女御霊神(あめますれいじん) 「むかし、飯沼の家の田植えに毎年素性の知れない美し い夫婦が手伝いに来た。田植えじまいの時、赤飯をご馳 走になると、いずこもなく立ち去った。ある日この家の男 衆がわみ沢の淵で魚釣りをしたところ、大きなあめのうお が釣れた。腹を割いてみたところ中からたくさんの赤飯が 出てきた。翌年の田植えに美しい姿の夫婦が現れなかつ たことから、夫婦がわみ沢に住むあめのうおの化身であつ たことを知った。そこでわみ沢の淵を見下ろす林の中に祠 を造り、天女御霊神として祀ったところ、夜になると淵から 「あめすさらば」と呼ぶ声が聞こえてきた。それから来る 年ごとに飯沼の家の田植えには、よく雨が降ったといふ。 36災害の時、その淵の面影はすっかりなくなつてしまつ た。」	○「上伊那文化 大辞典」pp.640。						○天女御霊神 「飯沼町本郷」に ある与田切川の 吐き出し口に、 あめす岩と呼ば れる岩があ り、同様の伝承 が伝えられてい る。岩の上には 天鼓懸大明神を 祀った祝殿が一 基ある。」					○淵の主=あめのうお(死亡、美 しい夫婦に化身) ○雨乞い ○災害によって消滅	D538	10		
81	中川村 葛島	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○葛島の水神碑 「旧堤の天端に建立された自然石を用いた立派な水神 碑。築堤記念が郷名が刻まれている。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.610		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.610	○水神碑 165K*100旧堤										—	D700	10
82	中川村 田島	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○戸隠山 「龍が刻まれ、戸隠山と刻られている。中川村田島天の中 川橋下流右岸、理兵衛の功德碑「天流功業義公明」となら んでいる。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.611		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.611	○九頭竜碑										—	D702	10
83	中川村 小和田	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○36. 6洪水復興記念碑 「新宮川の氾濫により新宮川及び中沢の堤防は破壊し、 この修復記念である。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.615		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.615	○災害記念碑 167K										—	D711	10
84	中川村 渡場	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○下河原復興之碑	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.615		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.615	○災害記念碑 162.8K										—	D712	10

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土土遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え、言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
85	松川町 元大島	1582年3月～4月 天正十年二月	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○大蛇が城 「大蛇が城(大島城)の崖下にある天竜川の深い淵には大蛇が棲むという。曇りどつない晴れた日の朝、淵の上より立ち昇る水気が霧の雨となって城に降りてそこのを渡る人たちは、大蛇の仕業だといって不吉の前兆でもあろうに恐れていた。天正十年二月、織田信忠の大軍が火矢で城を攻めた時、火の手があがると不思議にも淵の水が雨となって消されてしまった。これは大蛇の仕業だと淵に無数の矢を射込むと、淵の面に大波が狂い起き、天地晦冥の大雷雨が起こり、天竜川の水を真っ赤に染めて大蛇が淵の底深くに沈んでいった。そして城は洗われ、落城した。今でも城跡の傍を掘りおとすと真つ黒い糠米が出てくるという。また一説に城兵が、城に向かって大蛇が吐く水煙を不吉に思い、射殺した。守護を失った城は間もなく敵に攻め落とされたともいう。」	○「伊那谷の伝説」pp.1-2。 ○「伊那の傳説」pp.110-111。 												○淵の主=大蛇(死亡) ○自然現象=大蛇の怒り・苦しみ	1582- D520	10
86	松川村 元大島	—	治水・土木	○元大島の記念碑	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.615 	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.615	○築堤記念碑 旧堤										—	D713	10
87	高森町 吉田	1908年9月15日 文化五年七月二十五日	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○竜の腹の皮を拾った話 「雷が激しく鳴り出し、山や林がゆれ動き、天は傾き地がさげんばかりの嵐雨の翌日、木という木はみんな折れて目も当てられないほどであった。吉田村(高森町吉田)の与市は竜の皮を拾い、隣の山吹村のものが山で同じようなものが落ちていたといった。大きさは五尺六寸四方ばかり、青白く光沢がありあわみみたいのもので、天にいた竜がたかかったときの腹の皮だという。」	○「伊那谷の伝説」pp.6-7。 ○「天竜川の災害伝説」pp.11-12。												○自然現象=晴竜	1808 風雨- D521	10
88	高森町 下市田 出砂原	1752年12月 宝暦二年十一月	治水・土木	○惣兵衛堤防(大川除堤防) 「安政六年(1859)、旧堤に続いて下流へ延長六〇間の大川除接続堤防竣工。文久二年(1863)、大川除接続堤防の修繕工事を実施。元治元年五月(1864)、大川除堤・同接続堤防における天竜川洪水による欠損修復工事(捨石のあらし込み)の開始。昭和9年3月(1934)、延長100mの惣兵衛堤防木工沈床入れ替え工事を竣工。昭和36年6月29日(1961)、午後五時半に惣兵衛堤防700mが決壊し、市田水田のおよそ8割が没した。」	○「語りつぐ天竜川(惣兵衛川除)」(1805年) ○「下伊那川たんけんブック」pp.66。 ○「下市田色堤防之御銘」(寛政五年、総親長春、飯田市川島青兵衛蔵本) ○「水に挑む農魂」pp.21。 ○「伊那 昭和三六年十月号」	○「市田村大河除堤防」(1805年) ○「下市田村水除堤防」(1805年、文化二年、下市田堤防区所蔵) ○「惣兵衛堤防付近詳細田図」(長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書より) ○「水に挑む農魂」pp.21。 ○「伊那 昭和三六年十月号」	○惣兵衛の石碑 (嘉永七年、堤上北端) ○惣兵衛の碑 館(嘉永七年、市田村 安養寺の普道和尚による)							○水天宮の碑 祭り(4月10日) (堤防中部と用水路の間)		○水害に挑んだ人の姿と功績 ○人柱	1752- D541	10	
89	高森町 下市田 出砂原	1715年7月18日 正徳五年六月十八日 (未満水)	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○前亡後死三界万壺の碑 「正徳五年(1715)の未満水の時に流死した人の供養のため、市田村の百刹安養寺二世了溪(市田村羽生勝助氏)が主理となって建立した。安養寺の過去帳には、正徳五年六月十八日洪水、田島前沢より下は松川の間の田畑大損害人馬流死するもの多し、と記されている。」	○「天竜川の災害伝説」pp.8。		○前亡後死三 界万壺の碑										○犠牲者への弔い	1715 未満 水- D592	10
90	高森町 下市田 出砂原	1715年7月18日 正徳五年六月十八日 (未満水)	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○出砂原(高森町) 「正徳五年(1715)の未満水の時、大島山から天竜川に注いでいる大島川が満水となって土石流が発生し、大量の土砂が押し出されてきた。」	○「天竜川の災害伝説」pp.8。												○地名に託された災害伝承	1715 未満 水- D593	10
91	高森町 下市田 出砂原	1715年7月18日 正徳五年六月十八日 (未満水)	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○夜泣き石 「正徳五年未満水の時(1715)、大島川から運ばれたと伝えられている。」	○「下伊那川たんけんブック」pp.61。												○災害がもたらした地物	1715 未満 水- D552	10
92	高森町 山吹下平	—	治水・土木	○山吹下平の記念碑	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.616 	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.616	○築堤記念碑										—	D714	10

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 画、図解	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
100	喬木村 小川	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○九十九谷の伝説 「九十九谷がまだ百谷あった頃、その谷底に鬼が住んでいた。ある年の大荒れで一谷が埋まり九十九谷となった時、鬼は逃げ出して三里西山の市田村の大鳥へとびこした。その拍子に石の上に手をついた。その時の手の跡が深く石に残り、その窪みの中にたえず溜まっている雨水をいぼにつけると奇妙にも治るといふ。九十九谷を百と数えたら最後、鬼が出るか蛇が出るか、村中はみだれられてしまると云うので、二本の指を一本折っていつでも九十九と数えねばならない。(喬木村史談会 喬木村の伝説)」 ○小川川の濁り水 「少しでも雨が降ると濁った水が流れていた。雨が降ると九十九谷が崩壊して、谷川の水を堰ぎとめそこに水がたまる堰が崩れて出水となった。濁った水が流れるようになり、下流で鯉を飼っている農家でその水を使うと鯉が死に、生産が激減して困ったと云う。(古老の語り)」	○「九十九谷」 pp.6-7 7.28.37.45.12312 7.170-182.												○谷の主=鬼(移動) ○山崩れ=鬼の出現	D507	10
101	喬木村 小川	1928年9月 昭和3年9月	治水・土木	○九十九谷治山事業・塩沢砂防組合 「昭和3年9月(1928)、九十九谷の復旧を期して塩沢砂防組合が発足された。山腹工事が広い面積にわたって完工されていくに伴い付随しておこる雨水等への被害対処に苦心した。」 ○九十九谷生育の木材による大聖牛 「九十九谷の砂防事業により緑化した資源が、昭和25年の洪水時に九十九谷から流下する土砂のせき止めや道路保護のために作った大聖牛の材料となり効果を奏した。」	○「九十九谷」 pp.6-7 7.28.37.45.12312 7.170-182.						○九十九谷生育の木材による大聖牛					○災害に挑む人々の姿 ○官民一体の治山事業 ○砂防事業の効果事例	1928 洪水- D556	10	
102	—	—	文芸・民謡・ 詩	○九十九谷 「村人が命をかせし谷々に前えづる春の光さしたり 断崖を削る作業に取り組みし人らの偉業永久に伝ひざらむ 冬の月は暮るるに早し谷々は雪に埋みて夕昏らみたり(村沢武夫)」															
103	喬木村 伊久間	中世末期	治水・土木	○伊久間水除土手(掘削) 「長さ1,700m、高さ1m余りの掘削で、伊久間の人たちが集団で中世末期頃からつくりはじめたという。人家の多いあたりには水除土手は二重に造られている。しかし災害が遠くとその効力を忘れがちなため、掘削を埋めたり物を置いたり、いざいざを怠った。その結果、大きな雪が降った昭和2年6月には、妻がらなどが掘削の中に入っていたのでたちまちに水が溢れ出し、伊久間は災害に見舞われた。」	○「郷土のたから」 pp.77-78.	○伊久間水除土手 「郷土のたから」 pp.78						○伊久間水除土手					○災害に対する人の知恵の継承	D508	10
104	喬木村 伊久間	1558~1570 永祿年間	治水・土木	○永祿年間における川除普請、宇田屋付近の竹木の伐採禁止	○「九十九谷」 pp.28-37.123-127.170-182.												○防災対策	1558- D557	10
105	—	1639年 寛永十六年三月	治水・土木	○小川川をめぐる水利権争い 「寛永十六年三月(1639年)、伊久間村内伊久間川の余り水を小川川へ落としたことから小川村との争いが起こった。」													○災害がもたらした紛争	1639- D558	10
106	喬木村 阿島	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○阿島の復旧記念碑	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」 pp.617		○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」 pp.617	○災害記念碑 151K									—	D717	10
107	喬木村 (瀬戸滝)	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○悪い滝の主を退治した勇士 「瀬戸の滝には大蛇が棲んでいた。大蛇は毎年八月になると大水をだし、阿島の水田を流してしまつた。村人は大蛇を退治したいと考えて、勇士がでかけていくのだが一人も帰ってこなかった。ある年、通りかかった旅の武士に大蛇退治をお願いしたところ、武士は引き受けて大蛇を倒して帰ってきた。それから水もでなくなり、阿島の水田は秋になると稲穂が波打つようになった。後に大蛇を退治した武士は、上郷の野鹿山の姫宮でヒビ退治で有名な岩見重太郎であることがわかったという。」	○「喬木村話」下 巻pp.790-791.							○瀬戸滝					○滝の主である洪水をもたらす大蛇退治	D633	10

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
108	大鹿村 鹿埜	1961年 昭和36年6月27～29日 (36年災)	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○松尾幸久氏の36災害体験談 「27日、鹿埜地区で4軒流出。小さい村道の橋に木の根や 土石流が詰まり、水が方々に流れ出てしまうのに対処す るために外にいた3名が死亡。鹿埜川の水が橋を越す。牛 家に電話「電気が使えなくなる。語り部は山手の実家に遊 び何もできなかった。」 「28日、朝から手当たり次第に生活必需品を買い集める。 午後から降り出した雨により川が決壊。地震とともに流 木や1～2mもの大石が川の上を舞うように流れていた。村 の決死隊が救助を求めて山越えを開始。5～6日後に自衛 隊のヘリコプターが来た。」 「29日、雨が止み曇り空の中、大西山がドーンと落ち田圃 が全部つぶれ人も家畜も息たえに流された」 (教訓) ○災害時の広域的な協力体制 ○災害を起こさない、災害から逃れる工夫と努力を怠らな い ○自然の法則と生活の知恵を大切にし自然を無視した開 発をしない	○被災者が語 る土石流体験 集 まさかわが 家が・・・jpp.60- 62.	○川の濁流、荒 廃の様子 「被災者が語る 土石流体験 集まさかわが 家が・・・」jpp.60.												○自然を無視した開発への教訓	S36災 D510	4
109	大鹿村 鹿埜 (引田)	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○観音なぞと駒石 「遠いむかし、青木川のさき高いところにあるあかなぎ に住んでいた観音様か、引の田に住みたくなつて馬に乗つ て引越した。そのときの馬の蹴り上げで山が崩れ、 つかいなぎになってしまったので観音なぞというよう になった。引の田のつかいなぎにひとつとびに飛んだ拍子で 石がひっくりかえってしまい、馬の足跡がついた方が下つ かわになった。村の衆はその下で雨宿りができた。そこは 石の上で雪が降っても下側は雨になるといふことで、その 駒石を村中で大事にしている。」	○「大鹿村の民 話第一集 さか さいちろう」 pp.29-30.	○「大鹿村の民 話第一集 さか さいちろう」 pp.30.					○観音なぞ							○ナギの主＝観音様(移動) ○土石流＝観音様の移動 ○地物に託された災害伝承	D624	4
110	大鹿村 青木	1544年7月28日 天文十三年七月九日	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○横山七か寺・御堂島薬師の流失 「天文十三年七月九日(1544年7月28日)の大洪水で 横山七か寺(青木川を地蔵峠に向かう途中)、御堂島薬師 (下青木地区)が流出した。(大鹿村誌)この大洪水は、全 国的におこつたようで、京都でも大洪水で四條五條橋など が流失している。」	○天竜川の災 害伝説jpp.5												○災害によって消滅した地物	1544 洪水- D588	4	
111	大鹿村	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○復興記念碑 「36災害から4年後に大鹿村では災害復興記念事業とし て、役場の庭に「復興記念碑」を、大西山崩落地籍に「殉 難の碑」を建立し、復興記念式典を行った。」 「昭和36年梅雨前線集中豪雨により前古未曾有の大災害 を受け55名の尊き人命と40数億円の被害を蒙りしが復旧 について国県の援助と村民の一致協力により復興したの で時の建設大臣中村梅吉氏の揮毫により之を建つ、昭和 40年10月建之、大鹿村。」	○「大鹿村誌中 巻」jpp.826												—	D723	4	
112	大鹿村 大西山	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○殉難の碑 「昭和36年梅雨前線集中豪雨災害により尊き犠牲となら れた霊を記す。昭和40年10月建之 大鹿村。」 ○大西公園の大西観音 「大西山崩壊地の麓にある大西公園には、災害で犠牲に なった人を弔うための大西観音がある。」	○「大鹿村誌中 巻」jpp.826 ○「下伊那川た んけんブック」 pp63	○殉難の碑 「大鹿村誌中 巻」jpp.832	○殉難の碑				○大西観音							—	D724	4
113	大鹿村 大河原	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○斜面を転がってきた巨石 「36災害の時にマサが洗われて花崗岩の巨石が斜面を転 がってきた。」	○「伊那谷の土 石流と濁水」 pp.42	○斜面を転がっ てきた巨石 「伊那谷の土石 流と濁水」pp.42												—	D725	4
114	飯田市 川路 (姥射橋付 近)	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○烏帽子石(えぼし岩) 「仙人が烏帽子を忘れて去つたあとにできた岩とされてい る。相次ぐ洪水の際の出水の指標とされてきた。」	○天竜峡 歴 史と教情」 pp.233-234.256.	○水害のため 家屋移転した 人々の御「天竜 峡 歴史と教 情」pp.256.											○災害の指標	D511	11	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
115	飯田市 川路 (貝鞍が池)	1644年～1648年頃 正保の頃	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○貝鞍が池の主と人柱かわりの墓石 「昔川路村の天竜川ほとに貝鞍が池があった。飯田の殿 様で開拓事業好きの脇坂淡路守安元が、この池を埋め立 てて水田にしようといいつけたが、池には主の大蛇が住ん ているというので村役人たちは恐れていた。ある物知り爺 さんが、天竜に住む竜神の心を静めるために人柱をする がよいと言いつけたが、名乗り出る者がいなかったため、 人柱のかわりに村内の墓石や飯田の来迎寺の石碑を埋め たという。また、この頃見なれない美しい娘がひとり、天 竜川の川沿いの道を川路村から大下条村へ向かってい た。娘はとある農家を訪れ、手伝いを申し出た。ところが3 日目の朝、娘は井戸に水を汲みに行ったまま戻らなっ ても帰ってこなかった。井戸端には娘の足跡が踏んであり、 村人が井戸をさらってさぐってみたが何も見つからな かった。それからしばらくしたある日、晴れていた空がにわか にかき曇り、嵐が広がると稲妻が走り、大雷雨となっ て深見の里一帯を真っ暗闇に包みこんだ。雷鳴が止んだ 後、村人たちがほっとして辺りを眺めると、今まで青々とし ていた妻畑が見渡す限りの大池となって、波が立ててい た。村人たちは神威を感じ畏れ、池の湖畔に諏訪明神を 祀り盛大なお祭りを行った。」	○「天竜峡 歴 史と叙情」 pp.256-257。 ○「伊那谷の伝 説」pp.38-39。 ○「伊那の傳 説」pp.112-115。											○池の主＝大蛇(移動→深見の 池) ○池の出現＝大蛇の移動 ○人柱 ○水神の崇り、尾張津島社の受 入れと祇園祭 ○来迎寺 (長野県飯田市佐馬町1丁目54 TEL.0265-24-3794) (類似伝説) ・天龍村平岡宇連の大蛇 ・天龍村神原のとうちやげの池の 大蛇 ・飯田市川路の貝鞍が池の大蛇 ・阿智村浪合蛇峠の蛇が池の主 ・飯田市瀬町切石の池が洞の主	1644 頃- D523	11		
116	飯田市 川路	1758年 宝暦八年	信仰	○尾張津島神社の祇園祭(7月14日) 「洪水と悪疫の流行を水神の崇りと恐れれた村人が、領主松 平拱津守に願い出て尾張津島社をこの地に迎え入れ た。」	○「天竜峡 歴 史と叙情」 pp.256-257。				○尾張津島社			○尾張津島社 の祇園祭			○水神の崇りを鎮める行い	1758- D565	11			
117		—	治水・土木	○川路と龍江の境界争い 「両村で、水害による争いがあった。」												○災害がもたらす紛争	D566	11		
118	豊丘村 伴野	—	治水・土木	○伴野堤防記念碑 「伴野地区は古くより治水事業の盛んな所で、151K地点に 数々の記念碑が建立されている。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.616													D716	10	
119	飯田市 松尾	—	治水・土木	○弁天引堤記念碑 「飯田松川の右岸から弁天橋を経て清水にかける松尾堤 防を記念して建立された碑である。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617												D718	11
120	飯田市 時又	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○川路村からの移籍記念碑 「時又の川路村からの移籍記念碑で、裏面に川路から 時又に移籍した人々の氏名が記されている。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617												D719	11
121	飯田市 竜江	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三六災復旧記念碑	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617		○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.617												D720	11

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土ま遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踏・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
122	飯田市 川路	—	治水・土木	○川路郷家屋移転記念碑 「36.6災により川路地区の低平地の家屋は壊滅的な打撃を受け、災害後この地区の人々は移転した。」	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.618 	○「天竜川上流 河川事務所 三 十年のあゆみ」 pp.618	○築堤記念碑										—	D721	11	
123	飯田市 川路	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三六災害最高水位標 「天竜川総合学習館 かわらんべの前の河原にある。」	○「下伊那川た んけんブック」 pp63 	○「下伊那川た んけんブック」 pp63	○三六災害最 高水位標 「下伊那川た んけんブック」pp63											—	D722	11
124	飯田市 川路	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三六災害最高水位標(飯田市川路駅前の標柱) 「白くこった水が屋根までつき、助けてと書いた旗を立て ボートの救助を待った。人々は首まで水に流かりながら命 から逃げた。川路駅前の交差点には、三六災のとき 地上から3～4mの所まで水が来たことを示す標柱が立て られている。」	○「伊那谷の土 石流と満水」 pp.20 	○三六災害最 高水位標 「伊那谷の土 石流と満水」pp.20	○三六災害最 高水位標											—	D653	11
125	飯田市 竜江	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○尾科文吾のはなし(おしなぶんご) 「力持ちの文吾は飯田のお城の石垣を積んだり、天竜川 の舟を運んだりバカ力の持ち主であった。また心もやさ しかった。あるとき母さんが、生きてるうちに普光寺に参り たい、といったので母さんを背負い走って普光寺に参 った。普光寺に着き母さんを背中から下ろすと背中でゆり寝 されてしまったようである。文吾は大そう悲しみ涙をこぼし いくつもの池をつくった。」 「山の神の番人であった文吾は開墾をしたい悪い庄屋に だまされてしまいました。毒の水を飲んでしまった文吾は よるめき、文吾を縛めた八重をふみつぶしてしましまし た。文吾の涙があとからあとから流れ出し、山の谷々は文 吾の涙の洪水で埋まり、村々を襲い田畑も何もかも天竜 に流してしまった。(宮沢和夫:大蛇の城:昭和48年)」	○「下伊那の民 話」pp.74-78。 ○「大蛇の城 他3編」pp13-34。													○地豪=尾科文吾(人)の悲しみ	D648	11
126	飯田市 千代	—	ことわざ	(千代に伝わることわざ) ○猫が耳をこすると雨が降る ○壁がはねると雨が降る ○蜘蛛の巣が沢山かかると晴れる ○三日月の欠けた方が下を向いていると雨	○「千代村誌」 pp.743-744。												○千代に伝わる ことわざ	—	D547	11
127	飯田市 千代	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○亮瀧 「むかし黄昏時に野池方面から米川の河原町へと流れ来 た年令7、8歳ぐらいのどこか気高い美しさをもった娘乞食 があつた。隣部落の金持ち夫婦がひきとり、名をお香代と 名づけてわが子のようにかんがへた。お香代が物心づ いたある日、遊び友達から昔は乞食だったという話を聞か され、悲しい涙で送る日が多くなった。ある夜、お香代の姿 が忽然と消えた。夫婦はくまなく探したが見つからなかつ たので、あきらめて葬儀をおこなった夜、お香代が暗闇の 中でずぶ濡れで立っていた。お香代は夫婦にお世話に なつたお礼を述べ、亮瀧の主となったことを告げた。そし て、日照りて困った時に雨を乞うれば必ず雨を呼んでく ることを約束し、永遠の別れを告げて闇の中へと吸い取ら れていった。翌日夫婦は村人にこの物語を話し、お香代を 祀り不動様と呼んだ。今でも村人は米川の亮瀧で雨乞い をすることが習慣となっている。」	○「千代村誌」 pp.728-729。	○不動様												○瀧の主=お香代(人)の悲しみ ○雨乞い	D548	11

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体											キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号				
					形式知						暗黙知											
					文書、出版物	写真、画像、絵 画、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り	儀式				慣習・風習			
128	飯田市 (北方)	1652年のはじめ 承応のはじめ	治水・土木	<p>○今に生きている長左衛門「白河院の承保元年に奥山平大夫という人が開いた(北方南方両郷旧記)といわれる荒井川(用水)は度々山抜けが起こっており、百年も荒ればなしになっていた。これを知った飯田町生まれの山本長左衛門は、北方村に住むようになってから村民を救うために飯田城主の脇坂さまに河川工事を願い、仕事にとりかかった。しかし、水を通そうとしたところ基礎工事が進まなかったため、欠陥したりの田畑を流してしまっ。村民から恨みをかい、牢屋に入れられてしまった長左衛門は、獄中で設計書をつくり再び河川工事を開始して、とうとう水が流れるようになった。この功績により殿様からはおほほめにあずかり、村人から感謝されるようになったため、長左衛門は死んでからも人々の中で生きていくという。」</p> <p>○山本長左衛門頌徳碑 「新井川の工事を完成させた偉業を讃えて建てられた。」</p> <p>○荒井川 「笠松山麓近くの荒井川は度々の山抜けから“荒れる井”といった。」</p>	<p>○伊那谷の伝説」pp.50-51.</p> <p>○新井川 (https://www.edjidan.et.jp/07_kyosoku/inkai/s3_our_city_sida_jh_ws/kyosoku/ryuwa2.htmより)</p> <p>○山本長左衛門頌徳碑 (https://www.edjidan.et.jp/07_kyosoku/inkai/s3_our_city_sida_jh_ws/kyosoku/ryuwa2.htmより)</p>															<p>○災害に挑む人の姿</p> <p>○功績を後代に伝える</p>	1652 はじめ D522	10
129	飯田市 東野 (大宮諏訪 神社)	1715.7.18-24 正徳五年六月十八日 ~二十四日 (未満水)	信仰	<p>○大宮諏訪神社への祈願 「正徳五年(1715)未満水の時、人々が大宮の丘陵に逃げ集まり、大宮神社に加護を祈願した。すると水勢が一変し、北は野底川に南は松川へと流れが二分されて飯田城市は災害を免れたという。以後、風水害鎮護の神として崇められていた。」</p> <p>○大宮諏訪神社の式年祭(おねりまつり) 「正徳五年(1715)未満水の時、大宮諏訪神社高台に逃げた人々が一心に祈願をこめたところ、水勢が一変して飯田台地が大難を免れた故、飯田全町の喜びは限りなく報徳が敬神となり、全町あげての大祝祭を行うのが慣例となった。七年目千支の申年と寅年の四月一日から二夜にわたり三日間行われる。」</p>	<p>○東野の百年誌」口絵写真、pp.62-65,142-145.</p> <p>○大宮神社 「東野の百年誌」口絵写真 ○大井取入口(上郷町) 「東野の百年誌」口絵写真 ○36災害工事完成記念碑(宮の上) 「東野の百年誌」口絵写真</p>													<p>○ご加護のあった災害</p> <p>○祭りに継承された災害</p> <p>○大宮諏訪神社 (飯田市長上飯田/TEL:0265-23-7848)</p>	1715 未満水 D512	10		
130	飯田市 東野	1961年 昭和36年6月26~29日 (36災害)	災害の事象・災害体験・得られた教訓	<p>○丑満水記念碑 「36災害後、宮の上提の土手に建てられた。」</p>	<p>○東野の百年誌」口絵写真、pp.145.</p>														<p>○灌漑用水にまつわる利権争い (東野と上郷村)</p>	S36災 - D513	10	
131	飯田市 上郷別府	1715年7月18日~24日 正徳五年六月十八日 ~二十四日	民話・伝説・昔話 (洪水)	<p>○子泣き石(夜泣き石) 「正徳五年の未満水の時、野底川から運ばれたものだと伝えられている。この石の下に赤ん坊が押しつぶされ、雨の降る夕方などに悲しそうな泣き声が聞こえてくるようになった。かわいそうに思った近所の人たちが石の上にお地蔵様を祀ったところ泣き声は聞こえなくなった。このお地蔵様に願をかけると子どもの夜泣きが治ると評判が立つようになった。」</p>	<p>○下伊那川たんけんブック」pp.61. ○東野の百年誌」pp.63. ○伊那谷の伝説」pp.14. ○天竜川の災害伝説」pp.8-9. ○伊那の傳説」pp.204.</p>														<p>○災害がもたらした地物</p>	1715 未満水 D514	10	
132			民話・伝説・昔話 (洪水)	<p>○徳本さまの碑 「正徳五年(1715)のひつじ満水の後、徳本和尚が洪水で亡くなった人の菩提を申ったという。」</p>	<p>○上伊那歩こう会ホームページ (http://www.chubu.ne.jp/mihos/newspage6.htm)</p>														<p>○犠牲者の弔い</p>	1715 未満水 D595	10	
133	飯田市 上郷別府	1715年7月18日~24日 正徳五年六月十八日 ~二十四日	文芸・民謡・詩	<p>○正徳五年当時の歌 「早振る神代も聞かず野底山天王原に水上がるとは。」</p>	<p>○東野の百年誌」pp.63.</p>														<p>○当時歌われた歌</p>	1715 洪水 D555	10	
134			ことわざ	<p>○裏の河原での石済みに等しい 「北原米太郎が子弟とともに農耕の暇をさいて石置提を築く様子をみて、人々が口にしていた悲観的なことば。」</p>	<p>○郷土のたから」pp.70-72.</p>														<p>○裏の河原での石済みに等しい</p>	1891 洪水 D553	10	
135	飯田市 座光寺	1891年-1907年 明治24年~40年	治水・土木	<p>○信能堤防 「毎年霖雨期に濁流が氾濫し、利用されていなかった座光寺河原を良田に変えるため、北原米太郎が私財を投じて二十年間の辛苦を重ね、子弟とともに明治40年に完成させた石置提。」</p> <p>○北原米太郎の碑 「信能堤防の築設者の功績を讃えるために建立された。」</p>	<p>○北原米太郎の碑 「郷土のたから」pp.70.</p>														<p>○災害に挑む人の姿</p> <p>○功績を後代に伝える(石碑)</p>	1891 洪水 D515	10	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体											キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知						暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り	儀式				慣習・風習	
136	飯田市 松尾	1738年 元文三年	民話・伝説 普話 (洪水)	○うしろ向となった弁天様 「洪水による地形の変化により、島田村(飯田市松尾)と虎岩村・知久平村(飯田市下久堅)との間で境界線争いが続いていた。1738年(元文三年)の洪水の後、大岡越前守の裁きにより、弁天様が島田村のものとなった。ところが、弁天様は天竜川の東側がお好きとあって虎岩村・知久平村の方ばかり向いていた。怒った島田村の衆が、弁天様を島田村の方に向けたところ、村内で悪い病気が流行ったので東向きに戻した。悪い病気がすぐに治まったので島田村では、社殿のうしろから拝むようになった。また弁天様はどんな洪水の時でも流失したことがなかったが、36災害の時に流されてしまった。今ではもとのところに祀られている。」	○「伊那谷の伝説」pp.92-93. ○「下伊那川たんけんブック」pp.66.	○「下伊那川たんけんブック」pp.66.												○災害がもたらした紛争 ○弁天の大岡裁き	1738 洪水- D526	11
137	飯田市 松尾	—	民話・伝説・ 普話 (洪水)	○松尾弁天蔵宮神社 「松尾の引き違とともに現在地に縁設された。」	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.613	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.613												—	D706	11
138	飯田市 (弁天橋付 近)	—	民話・伝説・ 普話 (洪水)	○川原弁天 「弁天橋下流左岸側の河原の自然石の上に祀られている弁天、高遠の弁天と同様に出水規模の目安にされてきた。」	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.613	○「天竜川上流河川事務所 三十年のあゆみ」pp.613												—	D707	11
139	飯田市 鼎切石	—	民話・伝説 普話 (土砂)	○地藏岩 「關沢の奥深くまで薪を取りに行っていた人がいた。夕方になって狼がいたので、驚いて逃げた。關沢の山の神辺りまで来た時、山から岩が落ちてきて、狼に当たって殺してしまったので助かった。その岩は地震岩といつても通端にあり、雨が降りだす前などには岩の表面に地震様の姿が現れるという。」	○「鼎町史下巻」pp.1176-1177.						○地藏岩							○岩を落として村人を助けた山の神	D634	10
140	—	—	民話・伝説 普話 (その他)	○池が洞の主 「城山の池が洞にある池に、永年大蛇とも山椒かじともいう主が棲んでいた。池の堤がだんだん欠けてきて、いよいよ棲む事ができなくなったのを知り出だしてきた。須志角の河原を渡って下條の深見の池へ移った。山の奥宮辺には、その通過した道筋が隠れて小川らしい跡が残っている。」	○「鼎町史下巻」pp.1177.				○池が洞									○池の主＝大蛇・山椒かじか(移動)	D635	10
141	飯田市 上久堅	—	ことわざ	(上久堅に伝わることわざ) ○南山に雲がかかると雨が降る ○恵那山に雨が降るとすぐこちちにやってくる ○鍋の底に火がつくと雨が降る ○東土立は降りが強く長い ○雨蛙が鳴くと雨が降る ○雲が北へ向くと必ず雨、東に向くと小雨 ○雲が奥の高い所につくと強風がなく、低い所につくと強風がくる	○「上久堅村誌」pp.742-743.												○上久堅に伝わることわざ	—	D650	11
142	—	1225年7月15日 元仁二年六月二日	民話・伝説・ 普話 (洪水)	○大蛇が天竜川を流れていった話 「元仁二年六月二日(1225.7.15)、雨がひどく天竜川の水は激流がうずまき、得たいのれなれなものが沢山流れ、二丈(6メートル)もある大蛇も流れていったという。」	○「天竜川の災害伝説」pp.4-8.													○天竜川の主＝大蛇 ○鎌倉時代の洪水記	1225 洪水- D586	11
143	飯田市 下久堅 南原	1544年 天文十三年	民話・伝説・ 普話 (洪水)	○四百年前の南原橋 「四百数十年前、現在の飯田市下久堅南原にある黒瀬が淵の上に天竜川唯一の橋がかかっていた。(南原橋)天文十三年(1544)におこった洪水で、その橋が落ちた。その後ずっと橋はなく、明治二年になって赤須の山から持ってきた松の大木を使って橋がつくられた。」	○「天竜川の災害伝説」pp.4-8.						○南原橋							○災害によって消滅した地物	1544 洪水- D587	11
144	飯田市 下久堅 和久平	1624年もしくは1627年 寛永元年もしくは寛永四年	治水・土木	○堤防工事と百姓一揆 「寛永の大水(寛永元年と寛永四年、笹本氏の見解から寛永元年の洪水に関する可能性が高い)で數十町歩の田地流出、河原にあった家二軒も流された。度々このような水害に見舞われたので、時の飯田城主殿様様の家来である塩山次右衛門が和久平の彦右衛門にいつけて川除水御普請をさせた。ところが、堤防工事を進める際、小百姓にばかりに不公平なことをさせたので、大騒動が起きた。」	○「天竜川の災害伝説」pp.4-8.													○堤防工事にまつわる百姓一揆	1624 洪水- D589	11
145	飯田市 下久堅 北原	1715年 正徳五年	民話・伝説・ 普話 (土砂)	○北原の土石流 「正徳五年(1715)の大洪水で、下久堅北原の裏の洞が一晩でぬけてきた。その際、天竜川の流木が多かったので、川端にそれを拾いに行った人たちが多く、虎岩の五右衛門と和久平の助次郎が流されて行方不明となった。」	○「天竜川の災害伝説」pp.4-8.													○二次災害の教訓	1715 未満水- D591	11

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号				
					形式知					暗黙知											
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習		
158	清内路村	—	ことわざ	(清内路村に伝わることわざ) ○大雨が降った時、沢水が急に止まると、鉄砲水がかかる ○煙が直に立てば、天気良し ○トウモロコシの根が上がって張ると、雨風が多い ○恵那夕立は長降りがつづく ○上げの大風は、災害をよんでくる ○雨でっかき、(日射)後二雨 ○水瓶が、汗をかくと雨が降る ○鯉がはねると、雨が降る ○大樽(地名)に霧が立てば、雨降り ○大川の洪水が早くひくとまだ雨が降る ○膝や、頭痛がすると、雨が降る(フリケヤマム) ○カミカミ(上川蔵)の瀬音が、近く聞こえると、雨が降る ○ヨキト(子山)に雲がたると雨 ○御霊様の手洗水をまぜると雨が降る ○グマン峠の菓のひくい年は台風がくる	○「清内路村誌 下巻近・現代編 民俗編」pp.386- 388.												—	D563	14		
159	清内路村	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○明神山の太蛇 「大蛇(胴回り三尺、丈は三十尺)、目は北極星のように光り体は青白い鱗のようであった。その太蛇を近くで見てものは発熱し病気になる。不老な太蛇は猛威をふるい黒川、大平、松川入り方まで一夜にして獲物を探し回った。何年か過ぎ大蛇が衰え始めたとき、千年の大木が見る間に燃え、折柄の風に煽られ全山が火の海になった。村人が山を見ると大蛇が口から炎を吐いて怒りと火の海に浸っていた。その姿は神々しいまでに荘厳であった。そのとき大雷なり大蛇のあたりから黒霧が湧き上がり、七月七日夜、燃えた太蛇のあぶらで谷川の水が濁り八日ついに大蛇は燃えつき石をまいて体がバラバラになった途端、千貫の太石は生きあるものように転がりだして十町余り下った村裏の家の裏でピタリと止まった。今でもその石はどっかりとよきときの大蛇抜けを防ぐかのように横たわり、村のひとひとにめずらしがられている。」	○「伊那谷清内 路の民俗 」pp.396-397.													○蛇抜けから民家を守る石になつた大蛇の最後	D646	13	
160	阿智村 浪合恩田	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○蛇出しが池 「むかし浪合村恩田のお百姓が、家のうらてにある沼のあたりの草を刈ってきて馬に食べさせたところ、馬は苦しがり血を吐いて死んでしまった。近所の人たちは、その沼には池のまが住んでいるというのにその草を食べさせたからだと言っていた。翌朝、草を刈ったところが大きな池となり水が湧き出たので、お百姓はびっくりして池の端に祠を祀った。何年かたったある夜のこと、お百姓の夢に主が立ち、蛇出しが池に住んでいた体が池いっばいになって住みにくいので蛇峠の上に池をつくって明日ゆくと云った。翌日、西の方から真っ黒い雲がでてきて池の面が騒がしくなり、池のまが雲にのって蛇峠の方へ消えていったという。」	○「伊那谷の伝 説」pp.98. ○「伊那の傳 説」pp.98-102.					○蛇出しが池									○大蛇の引越し	D560	14
161	阿智村 (蛇峠)	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○蛇峠の池(蛇が池) 「むかし蛇峠に大きな池があり、主の大蛇が棲むといわれ蛇が池と呼ばれていた。ある日、峠の方から見馴れぬ小娘が下りてきて、村の庄屋に今日から深見へまいると馴れ馴れしく暇をいした。不思議に思った庄屋が後をつけていくと、波合川の橋の途中で姿が消え、大水が流れ落ちていくように見えた。それで初めて小娘は蛇が池のまであつたと知った。その日、大下条村深見の里に大きな池ができた。今では、この池を雨乞ひ瀬と呼び、旱の時にこの池の水を汲んできて祠に供えて雨乞ひすると、必ず雨が降るといふ。村の人たちは、水出を恐れて平常は一切この池の水を汲まないようにしているという。」															○雨乞ひの恩恵(蛇が池)	D530	14
162	阿智村 浪合	1957年6月27日 昭和32年6月27日	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○馬島先生顕徳碑 「昭和32年6月27日、豪雨災害の救援奔走中に山腹の壁落に遭遇し殉死。村葬を挙げて顕徳碑を建て偉業を記す。」	○浪合村誌下 巻」pp.994-997.													○災害救助中の殉職者	1957 土砂 D- 651	14	
163	泰阜村	—	ことわざ	(泰阜村に伝わることわざ) ○梅雨時に鳴神山に山崩れがあると梅雨が明ける ○天竜川に沿って雲がのぼると雨が降る ○遠山祭りが始まると山が荒れる ○打沢霧はあと晴れる ○早稲に鳴神山でお祭りすると三日以内に雨が降る ○八霧峠の霧が天竜霧を押しと雨になる ○霧の菓が低いと大風が吹く ○帆掛け船の帆が利くと翌日は雨となる ○三カ月の上弦の時は雨が多く下弦の時は雨が少なくなる ○向かいの山(大下条)を霧が北に這ううちは雨は上がらない ○川の瀬音が高いと雨が近い ○タルノ沢の霧が怒田に下ると雨になる	○「泰阜村誌下 巻」pp.854-855.													○泰阜村に伝 わることわざ	D567	11	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
164	泰阜村 田本	—	民話・伝説・ 普話 (その他)	○成瀬が酒の女 「むかし田本のある家に氣立てがよく美しい女中がいて主人から愛されるようになり、風を宿した。いつも女は井戸をのそいで、自分の姿を見ていたというが、ある日西空に入道雲が出、たちまち雷雨となり女の姿が消えた。ある夜、主人の夢枕に女が立ち、不憫に思うなら遠江国の成瀬が瀬にきて、女の名を記した紙を瀬に沈め、大きな声で名を呼んでほしい、と言った。主人は何もかかってその瀬を見つければ再会を喜んだ。やがて別れの時、女は寂しげな表情で水の中に帰っていく姿を見ないでほしいと頼んだが、主人がもう一目姿をみたいと振り向くと大蛇が金色のうろこをひらめかし、十二本の角で波を掻き分けながら瀬の底へと沈んでいった。それから田本の里には凶事が続いたので、里人たちは成瀬が瀬のたたりであろうと言い、蛇の姿を石に刻んで神に祭り、毎年盛んなお祭りをして大蛇のたたりを鎮めるようになったという。」	○伊那谷の伝説pp95-86.												○成瀬が瀬(遠江)の大蛇のたたり	D525	11	
165	阿南町 東条	1644年頃 正保の頃 (大雷雨)	民話・伝説・ 普話 (その他)	○深見の池伝説 「かつて、川路の具敷の池を埋め立てて新しい田を作ることになった頃、このあたりでは見なれない美しい城がひとり、天竜川の川沿いの道を深見の里へとやってきた。城はとある農家を訪れ、手伝いを申し出た。ところが3日目の朝、娘は井戸に水を汲みに行ったまま戻らなくなって帰ってこなかった。井戸端には娘のスカートが脱ぎ捨ててあり、村人が井戸をさらってさかして見たが何も見つからなかった。それからしばらくある日、晴れていた空がにわかにかき曇り、黒雲が広がると稲妻が走り、大雷雨となって深見の里一帯を真っ暗闇に包みこんだ。雷鳴が止んだ後、村人たちがほっとして辺りを眺めると、今まで青々としていた麦畑が見渡す限りの大池となって、波が逆立っていた。村人たちは口々に「竜神さまのお怒りだ」「お祭りをして、水の霊を慰めなくては」と言いあい、ただちに池の端に諏訪神社を祀り、毎年7月になるとイカダを組んで池に浮かべ、神楽を奉納して池の主を慰めることになったという。また、池の底は深く龍宮に通じているともいう。」	○伊那谷の伝説pp64-65. ○阿南町ホームページ /kankouguide/hukami-nojionmatur.html	○深見の池 (http://www.town.ananagano.jp/kankouguide/hukami-nojionmatur.html)			○諏訪神社	○深見の池								○複数ある深見の池の主伝説 (天龍村神原のとうちやげの池の大蛇)(飯田市川路の具敷が池の大蛇)(阿智市浪合蛇峠の蛇が池の主)	1644 雷雨- D524	12
166	阿南町 東条	—	民話・伝説・ 普話 (その他)	○とうちやげの池の主 「むかし神原村唐沢にあったとうちやげの池の主が、ある年の大雨で池の水が欠潰しなくなってしまったので、深見の池に逃げてきた。それから近くの寺では、鐘をつくくと大蛇が暴れ出すからと言って、鐘をつくす事を止めたという。」	○伊那谷の伝説pp64-65. ○阿南町ホームページ ○伊那の傳説pp102.112-121.					○とうちやげの池 ○唐沢							○大蛇の引越し	D576	12	
167	阿南町 東条	—	民話・伝説・ 普話 (その他)	○大蛇になった母 「天正十五年(1587)吉田城の下条氏が没落した。その知らせを聞いた下條康氏の母は城を抜け出し、深見の百姓家に隠れていた。間もなく訴人があって身が危なくなったので、母は井戸へ身を投げた。すると井戸が一夜に湧れて大きな池になった。大蛇の姿になった池の主は世を呪って村中の田畑を荒しまわったので、百姓たちは祠を建てて死者の霊を慰めた。この池ができてから近くの寺では、鐘をつくくと大蛇が暴れ出すからと言って、鐘を潰す事を止めたという。」	○伊那谷の伝説pp64-65. ○阿南町ホームページ ○伊那の傳説pp102.112-121.												○人への恨みが大蛇と化身した	D579	12	
168	阿南町 東条	—	信仰	○深見の祇園祭 「竜神様の怒りを静めるために行われるようになった。祭りの準備は、7月第4土曜日に「はやくさ」と呼んで、氏子総代と人の長子がみんなてひとり束ずつのワラを持って神社に集まり、神輿から池の水の出入口までワラでしめ縄を張る。池に浮かべるイカダや高さ66mにのびる三國の櫓、御旗、提灯、火花などの準備をし、夕方になって津島様を神輿に移し、神前の庭に運び出して行列が進められる。神輿を担ぐ人の衣装は、白衣に青袴を決ましている。行列は三國の櫓の周囲を3周し、獅子舞を先頭に池に向かって降りていく。イカダに乗り移ると12の提灯に灯が点り、イカダが岸を離れると火花が打ち上げられ、湖上で祭典が始まる。フィナーレは、神輿が神社に戻ってからで、三國の櫓に仕込んである火花に火が点けられ、人々は火の粉を浴びながら踊り回る。また、イカダに汚れた者が乗った時には、龍神の怒りでイカダが沈むという。」 ○津島社 「諏訪神社(深見地区の鎮守様)境内にある。竜神さまのお怒りを静めるために祀られた。」	○伊那谷の伝説pp64-65. ○阿南町ホームページ ○伊那の傳説pp102.112-121.				○津島社				○深見の祇園祭					○主(大蛇)の怒りを鎮めるお祭り	D577	12

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号		
					形式知					暗黙知									
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踏・音楽	祭り				儀式	慣習・風習
169	売木村	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○雷岩と呼はり岩 「夏の日照りが続いたので、働き者のていごろうが家に息子のやすべいを置いて、毎日水汲みをしている時、雨よどく降ってくれ、とぶつぶつぶやきながらゆくり歩いてたが、その足が止まりへたへとしゃがみこんだ。背中の水がていごろうにかり、その時一番重から光り始めた天から雨が降り出した。 雨はしだいに激しくなりたちまち乾いた地面を染めていく。洪水になって田畑が流されてしまうのではないかと心配になってきた四日目の夜に季節外れの稲妻が光り、雨はそれなりにあがった。しかし、ていごろうは帰ってこなかった。翌朝、村人が栗谷沢の傍らで、今まで誰もみだこともない岩が雷に打たれたたかか、湯気を立ち上らせているのを見た。やすべいは、その年の大晦日のよるに母と妹でいろりを囲んでいると、横前の原っぱの見たこともない岩が呼びかけてくる気がした。その岩は栗谷沢の岩に呼びかけていて、この岩に父の姿がはっきりと見えてきた。」	○「下伊那の民話」pp.124-128.												○雨乞い	D649	15
170	天龍村 長島 (大蛇)	1662年 寛文二年 (寛文地震)	民話・伝説・ 昔話 (地震)	○大蛇が池 「大蛇が棲む池があったが地震で崩れた。大蛇は和知野川を下って天竜川に出、千木沢川をさかのぼって深見ノ池をつくり移り棲んだという。」	○「天龍村誌」pp.84.	○大蛇の柳沢、450m付近「天龍村誌」pp.84				○大蛇、鬼ヶ城「崩れに関係した地名。」							○寛文地震による深見ノ池の崩壊史実 ○平坦な谷底、水田地だった(橋の沢450m付近)	1662 地震 D531	12
171	天龍村 平岡	1821年 文政四年	信仰	○水上様 「文政四年(1821)に櫻瀬に祀られた。櫻瀬は天竜川にある満島の船着場であったが、現在は平岡ダム completionにより水の枯れた河原となっている。」	○「郷土のたから」pp.74-77.	○満島船着場跡「下伊那川たんけんブック」pp.56.			○水上様								○ダム建設により消えた水上様	D578	12
172	天龍村 神原	—	民話・伝説・ 昔話 (洪水)	○とうぢやげの池 「むかし神原村唐澤(天龍村神原)の奥の入りの谷といつウチヤゲと呼ぶところに天池があった。ある年大雨の時、池の堤が崩れて河水が氾濫し、池の水がなくなつたため大蛇は居所を失い、深見の池へ逃げていったという。また、とうぢやげ池の主である大蛇は、時々出でて水の出口を塞いだため、河の水の手上がる事が度々あったので、その河のあるところをから澤と呼ぶようになった。」	○「伊那の傳説」pp.102.				○唐澤								○大蛇の引越し	洪水- D532	12
173	天竜川	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○天竜川の由来 「むかしの諏訪湖は上伊那、下伊那の三郡にわたり周囲六十里もの細長い水海で、竜の海と呼ばれていた。また、この地方出身の竜宮船頭安曇磯丸という強くてかじこい神さまが、天皇と同じ資格をそなえていたので天竜大神と呼ばれていた。当時の人たちは天竜大神の天をとって、諏訪湖のことを天の竜海と呼ぶようになった。その後、天変地異により下伊那の南の山々が崩壊を起し、堰き止められていた天の竜海の水は一度に太平洋へと流れ込んだ。この異変により、天の竜海は奥に洲羽湖(すわこ)を残し、あとは細長く深い谷間に変つたという。」	○「水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水」pp.3-14. ○「災害をこえて」pp.17-19.				○天の竜海(天竜川)							○天竜川の由来 ○天変地異による諏訪湖の決壊	D584	1	
174	天竜川	—	民話・伝説・ 昔話 (その他)	○あばれ天竜 「大昔、蛇の胴をし、鹿の角を付け、兎の目と牛の耳、龍の足をもったそれは大きな竜が南の海に生んでいった。この竜ははじめはおとなしく仏様におつ返していたが、大きくなるに連れ気性が荒くなり、力も強くなりそばにいるものに喧嘩ばかり仕掛けていた。仏様は我慢できなくなり、この竜を天の果へ追い払ってしまった。ところが竜は天へ追われてからも暴れ放題で、自分が一番えらいと思うようになった。誰も恐がつて竜によりつく者はいなくなったが、信濃の頂の山々は毅然として竜に抗えんことをきかえ立ち、中でも諏訪湖の南の側にそびえ立つハヶ岳はいつも強そうに立っていた。これに腹をたてた竜は喧嘩をしかけハヶ岳に休当たりし、山肌を長い脚で幾重にも巻きかいてばい締めつけた。ハヶ岳もおおなかに力を入れてじっと我慢したが、さすがにこらえきれなくなり、地面が割れて竜の方からどとばかり火を吹き、一気に爆発してしまった。竜は、そのものすくい海風のために天高く打ち上げられてから伊那の山々の間へとさっと落ちた。その後この天の竜はどこへ行つたかは誰も知らないが、落ちたところに大きな跡がつき、その跡が川になってながれたので、この川を天竜川と呼ぶようになったという。」	○「辰野町の誕生と伝説」pp.289-290.				○天竜川								○ハヶ岳の噴火と天竜川の由来	D642	1

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号			
					形式知					暗黙知										
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り				儀式	慣習・風習	
175	諏訪湖	—	民話・伝説・ 昔話 (土砂)	○甲賀三郎伝説 「三人兄弟の末子である三郎が、兄たちの計略によって信濃の暮科山の洞穴に閉じ込められ、地底をさまい故郷の近江に戻ったが、いつしか身は蛇体に変わり、人々から恐れ嫌われた。身の危険を感じた時、釈迦堂の老僧の教えによって菖蒲ヶ池に身を沈め呪文を唱えると元の体に戻った。妻と再会した三郎は後に信濃の諏訪神社上社の神となり、妻の春日姫は下社の神になったという(ヨリタカ系縁起)」 「三郎は山中で兄にだまされて谷底へ突き落とされた。九死に一生を得るが、身は大蛇に変わり、地底の穴を廻って信濃のナギの松原に抜けたという。故里が恋しく三十三年にして甲賀に帰るが、蛇体の三郎を音が恐れた。観音堂に入り一心不乱に祈念していると大蛇の形が抜けて死に戻った。やがて三郎は甲賀の長となり家も栄えたが、後に信濃の国へ行ってしまった。人々の夢の中にできた三郎は、諏訪明神の化身であったと告げたという。(カネエエ系縁起)」	○水利開発に みる中世諏訪の 信仰と治 水Jpp.3-14.												○諏訪明神の由来	D582	1	
176			文章・民謡・ 詩	○於自理皮礼 守矢殿義平巻上而 百舌鳥籠智察可婆 鎌造具倍斯(諏訪旧跡志・修補諏訪氏系図) 「諏訪地方の人々の間に古くから唱え継がれてきた民謡。諏訪湖から天竜川が流れ落ちていく湖尻の方向が晴れ上がり、しかも天竜川の源流地のひとつに数えられる神体山の守矢の上へ、竜蛇のように雲が巻き昇って里の方でモズの鳥がギチギチ鳴いたならば、利器である鎌を研いで草刈らなくても雨は降らない、もう大丈夫、という意味。」														—	D583	1
177	南信濃 天竜川	—	信仰	○人柱 「昔、南信濃の天竜川に長い橋が架かっていた。毎年毎年大水で流されてしまうので、村中の人々が集まって対策を話し合っていた。ひとりの男が人柱の話をしたところ、その男は殿初に言い出したという理由で人柱に選ばれてしまった。男の息子は悲しがり、父は矢作の人柱 キジも鳴かずば寝たれまい、と詠んだ詠を父が理められている柱に貼り付けた。村の人たちのためにはなつたが、父が余計なことを察したためにこんなめに遭わねばならなかつたと悔やんでいる息子の姿をみて村人は、橋を渡る際に息子の歌を思い出し、死んだ男のおかげで安心して渡れることがあったという。」	○伊那谷の民 話集Jpp.130- 131.												—	—	—	
178	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○H18災記念シンポジウム記録 「平成18年7月豪雨による上伊那地域で発生した土砂災害による被災者や防災関係者の体験談や災害の実態についてまとめられている。」	○平成18年7 月 豪雨と上伊 那の土砂災害」												○未来への提言・教訓	—	—	
179	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○天竜川史料	○天竜川資料													—	—	—
180	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○伊那谷賛歌 天竜川上流砂防事業50年の歩み	○伊那谷賛歌 天竜川上流砂 防事業50年の 歩み													—	—	—
181	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○語り継ぐ災害の記録 伊那谷災害記念特集号	○語り継ぐ災害 の記録 伊那谷 災害記念特集 号													—	—	—
182	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○中部の砂防小史	○中部の砂防 小史													—	—	—
183	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○写真集 中部の災害	○写真集 中部 の災害													—	—	—
184	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三六災害二十周年記念誌 恐怖の豪雨	○三六災害二十 周年記念誌 恐怖の豪雨													—	—	—
185	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○長野県下伊那郡竜東地方の地質と災害について(原稿)(北澤秋司)	○長野県下伊 那郡竜東地方 の地質と災害に ついて(原稿)、 pp.24-27													—	—	—
186	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○生田に於ける地質と災害(原稿ノートより)(北澤秋司)	○生田に於ける 地質と災害(原 稿ノートより)													—	—	—

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体										キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号
					形式知					暗黙知							
					文書、出版物	写真、画像、絵 図、旧版図	石碑・記念碑	水神碑・石仏	神社仏閣・塚	地名	土木遺構・要 石・名勝・旧跡	語り伝え・言い 伝え	伝統芸能・舞 踊・音楽	祭り			
187	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○被災者が語る土砂災害体験集「まさかわが家が…」	○被災者が語る 土砂災害体験 集「まさかわが 家が…」											—	—
188	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○増補 伊那谷の災害と凶作(村沢 武夫)	○増補 伊那谷 の災害と凶作											—	—
189	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○田切ものがたり 天竜川上流右岸の田切地域の歴史的 考察(赤羽篤)	○田切ものがた り 天竜川上流 右岸の田切地 域の歴史的考 察											—	—
190	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○防災教え歌 地域の防災力を高めるために	○防災教え歌 地域の防災力 を高めるため に											—	—
191	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○伊那谷の災害	○伊那谷の災 害											—	—
192	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○平成18年7月豪雨の記録 天竜川上流の出水	○平成18年8 月豪雨の記録 天竜川上流の 出水											—	—
193	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○上伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちのくらし ○下伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちのくらし	○上伊那川たん けんブック 天 竜川とわたし たちのくらし ○下伊那川たん けんブック 天 竜川とわたし たちのくらし											—	—
194	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三六災害40周年 伊那谷の土石流と満水	○三六災害41 周年 伊那谷 の土石流と満 水											—	—
195	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○川筋の変遷 天竜川と三峰川の場合	○川筋の変遷 天竜川と三峰 川の場合											—	—
196	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○語り継ぐ天竜川シリーズ 諏訪湖～氾濫の社会史(北原優美)、惣兵衛川除(市村成 人)等	○語りつぐ天 竜川シリーズ											—	—
197	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○大西山崩壊と大西村の復興	○大西山崩壊と 大西村の復興											—	—
198	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○明日に伝える三六災害	○明日に伝える 三六災害											—	—
199	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○伊那路 昭和36年10月梅雨前線災害特集号(続)	○伊那路 昭和 36年10月梅雨 前線災害特集 号(続)											—	—

(近代的な媒体による災害教訓伝承)

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体		キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号
					形式知	暗黙知			
K1	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○関係自治体の防災ホームページ	インターネット・電子媒体		—	—	
K2	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○長野県危機管理局ホームページ	インターネット・電子媒体		—	—	
K3	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○天竜川上流河川事務所ホームページ	インターネット・電子媒体		—	—	
K4	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○36年災の記録映画(中央構造線博物館、天竜川総合学 習館かわらんべに所蔵)		演劇・映画・紹介ビデオ等の映像	—	—	

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体		キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号
					形式知	暗黙知			
K5	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○高森町ふるさとミュージカル「惣兵衛堤防に咲いた花」		演劇・映画・紹介ビデオ等の映像	—	—	—
K6	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○ケーブルテレビ エルシーブイの製作番組		テレビ・ラジオ	—	—	—
K7	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○伊那ケーブルテレビジョンの製作番組		テレビ・ラジオ	—	—	—
K8	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○エコーシティー駒ヶ岳の製作番組		テレビ・ラジオ	—	—	—
K9	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○防災カルタ(駒ヶ根市)	紙芝居・カルタ・絵本・ゲーム		—	—	—
K10	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○長野県福祉協議会が開発した「外国籍住民のための震災模擬体験すごろく」(駒ヶ根市)	紙芝居・カルタ・絵本・ゲーム		—	—	—
K11	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○天竜カルタ(飯田市立龍江小学校)	紙芝居・カルタ・絵本・ゲーム		—	—	—
K12	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○天竜川シンボ(天竜川上流河川事務所)		イベント(シンポジウム・フォーラム・講座・講習会・見学会等)	—	—	—
K13	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○平成18年7月豪雨と上伊那の土砂災害ー未来への提言ーシンポジウム(伊那建設事務所)		イベント(シンポジウム・フォーラム・講座・講習会・見学会等)	—	—	—
K14	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○道徳式(岡谷市湊地区)		イベント(シンポジウム・フォーラム・講座・講習会・見学会等)	—	—	—
K15	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○市民土石流危険演流見学会(岡谷市)		イベント(シンポジウム・フォーラム・講座・講習会・見学会等)	—	—	—
K16	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○北島災害伝承の碑除幕式(箕輪町 天竜川北島地区豪雨災害を伝える会)		イベント(シンポジウム・フォーラム・講座・講習会・見学会等)	—	—	—
K17	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○児童と住民による災害に強い森林をめざした広葉樹の植林作業(岡谷市西郷区)		学習・教育・訓練	—	—	—
K18	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○土石流災害学習(岡谷市湊小学校)		学習・教育・訓練	—	—	—
K19	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○理兵衛堤防の総合学習(中川村西小学校)		学習・教育・訓練	—	—	—
K20	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○三峰川みらい会議		学習・教育・訓練	—	—	—
K21	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○伊那谷自然友の会		学習・教育・訓練	—	—	—
K22	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○天竜川ゆめ会議		学習・教育・訓練	—	—	—
K23	—	—	災害の事 実・災害体 験・得られ た教訓	○出前講師(天竜川上流河川事務所)		学習・教育・訓練	—	—	—

No.	市町村 大字	発祥年代 (関連する災害名称)	伝承内容	伝承の詳細	伝承媒体		キーワード	地点 No.	1/5万 図郭番号
					形式知	暗黙知			
K24	—	—	災害の事案・災害体験・得られた教訓	○「飯田大火60年 まちを変えた大災害を振りかえる」(飯田市美術博物館 特別展示)	普及啓発施設(博物館・情報館・資料館・歴史館等)		—	—	—
K25	—	—	災害の事案・災害体験・得られた教訓	○中央構造線博物館・天竜川総合学習館かわらんべ	普及啓発施設(博物館・情報館・資料館・歴史館等)		—	—	—